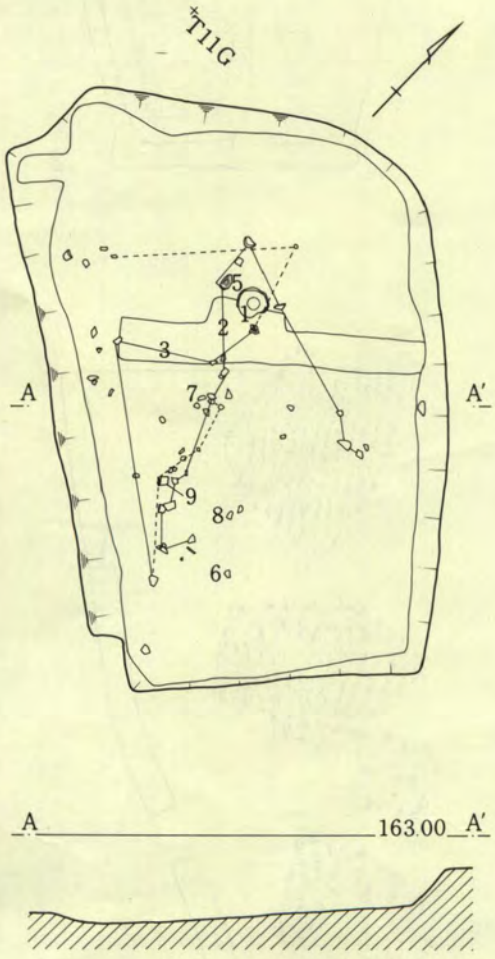
2.　F・G区

(1)　検出した遺構と遺物（第53～113図）

F区・G区で検出された遺構は、縄文時代の竪穴住居址（SH 2～7）が6軒、土坑（SD 5～27）が23基、奈良～平安時代の生産址（炭窯5基、須恵窯1基、鉄製址1基）土坑（SD 4）が1基である。

本区は、E区より東方にカーブして南東に湾入する小谷地を跨いで再び台地平坦部にもどる地区で、F区は小谷地区が占め、G区が台地の平坦部に位置する。F区では生産址群と竪穴住居址群が集中し、G区では竪穴住居址を環状に廻る土坑群が検出された。尚、生産址群は別項で扱う。

SH 2（第53図）



第53図　SH 2平面図

本住居址はF区S11Gの北方に検出された。平面形は北辺と西辺部の一部が残存するが、南辺と東辺は斜面に吸収される為、明確を欠く。残存部で北辺が4mほど、西辺部が2.5mほどを測る。床面は軟弱のロームで、サブトレンチの結果でも明確な面は把握できない状況であった。しかし、埋甕炉の検出により、おおよそのレベルを推測することが出来た。炉址、柱穴等は検出されない。埋甕炉は北、西辺よりほぼ1.5mを測る位置に正位に埋設したものである。

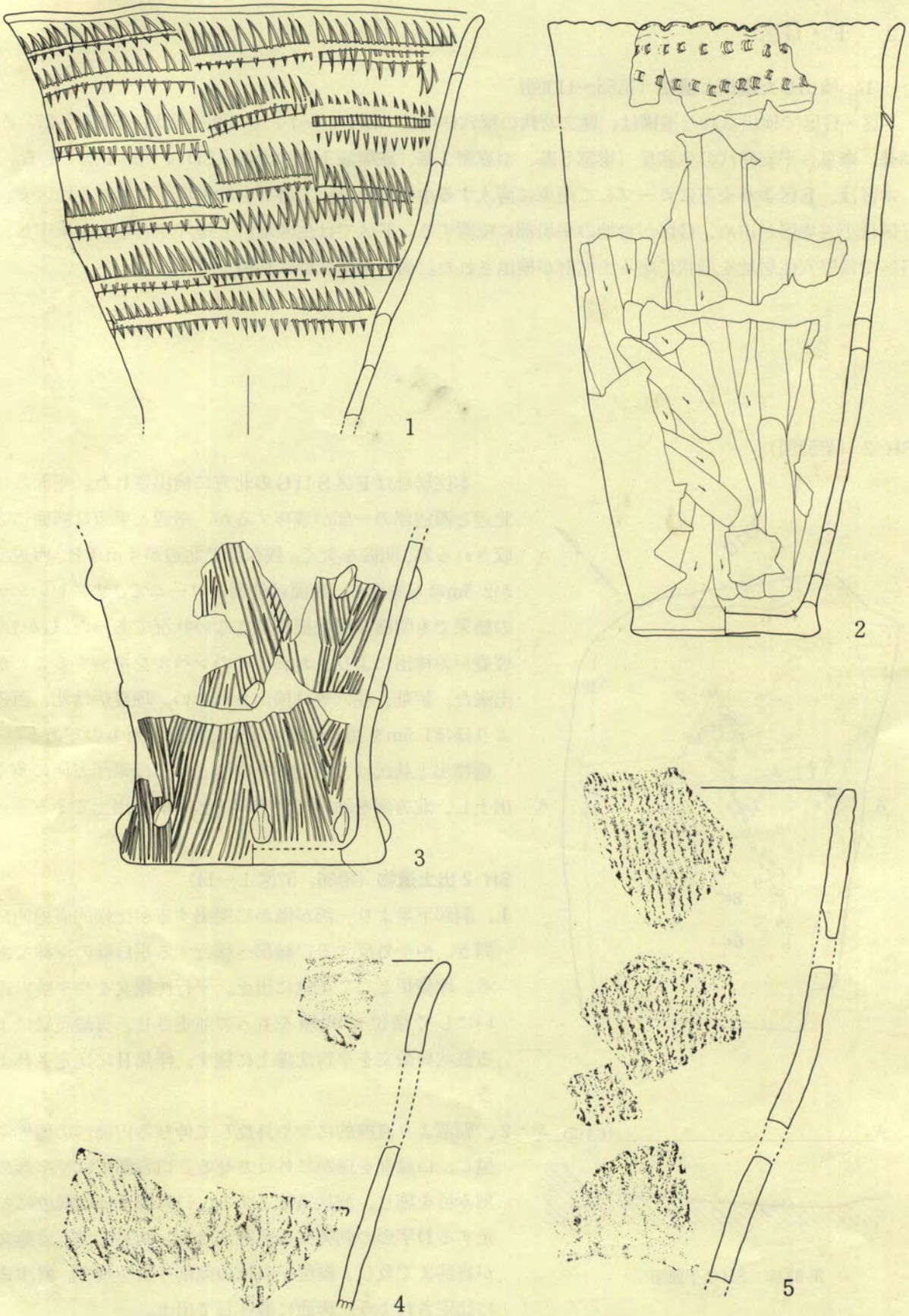
遺物出土状況は、埋甕炉を中心として南東部方向に多く出土し、北方部を除いて他方向は散在的な出土である。

SH 2出土遺物（第56、57図1～14）

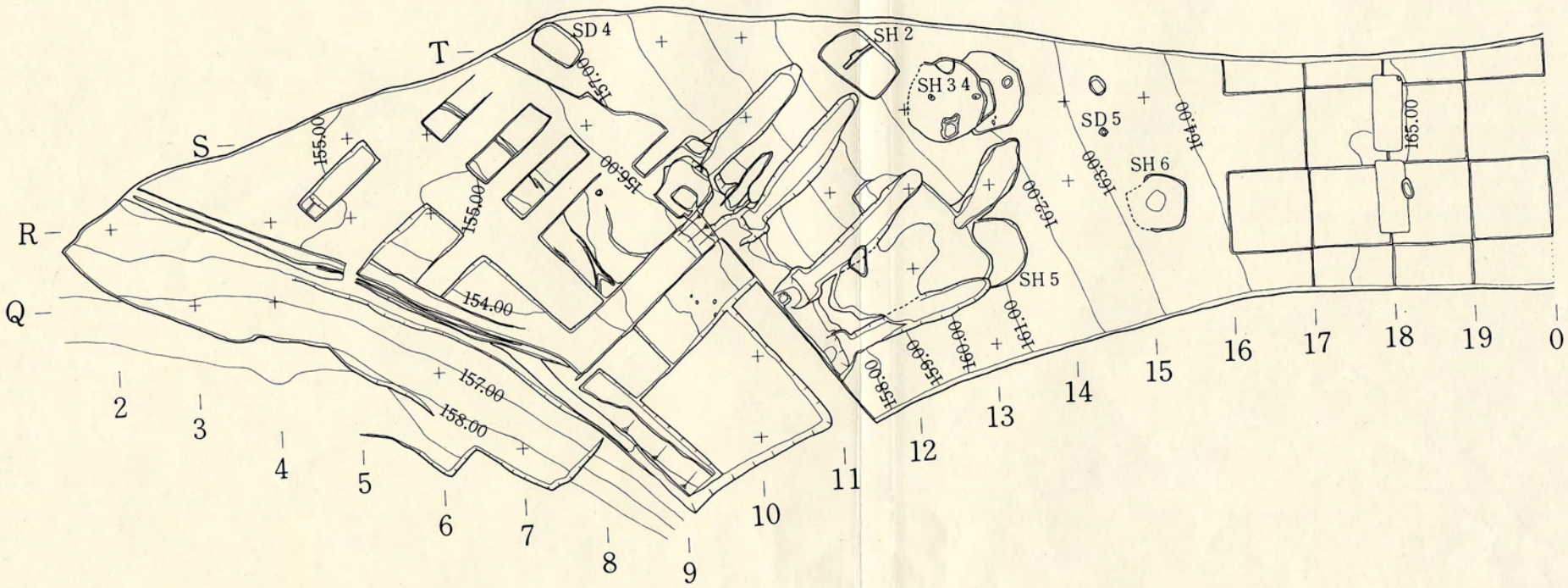
1．胴部下半より一部が僅かに突出するが比較的直線的に開き、やや外反する口縁部へ移行する平口縁の深鉢である。埋甕炉として正位に出土。平行沈線文をやや喰い違いにして横位に間隔をもって並走させ、貝殻腹縁による波状貝殻文を平行沈線上に施す。浮島IIに比定されよう。

2．胴部より直線的にやや外反して伸びる円筒形の器形を呈し、口縁部を僅かに外反させる。口唇部にはV字形の刻み目を施し、波状気味とする。口唇部下には横位に並走するD字形の刺突文を連続させる。刺突文帯下は無文が底部まで及び、縦位、斜位の箆削り痕を残す。興津式に比定されよう。床面に散在して出土。

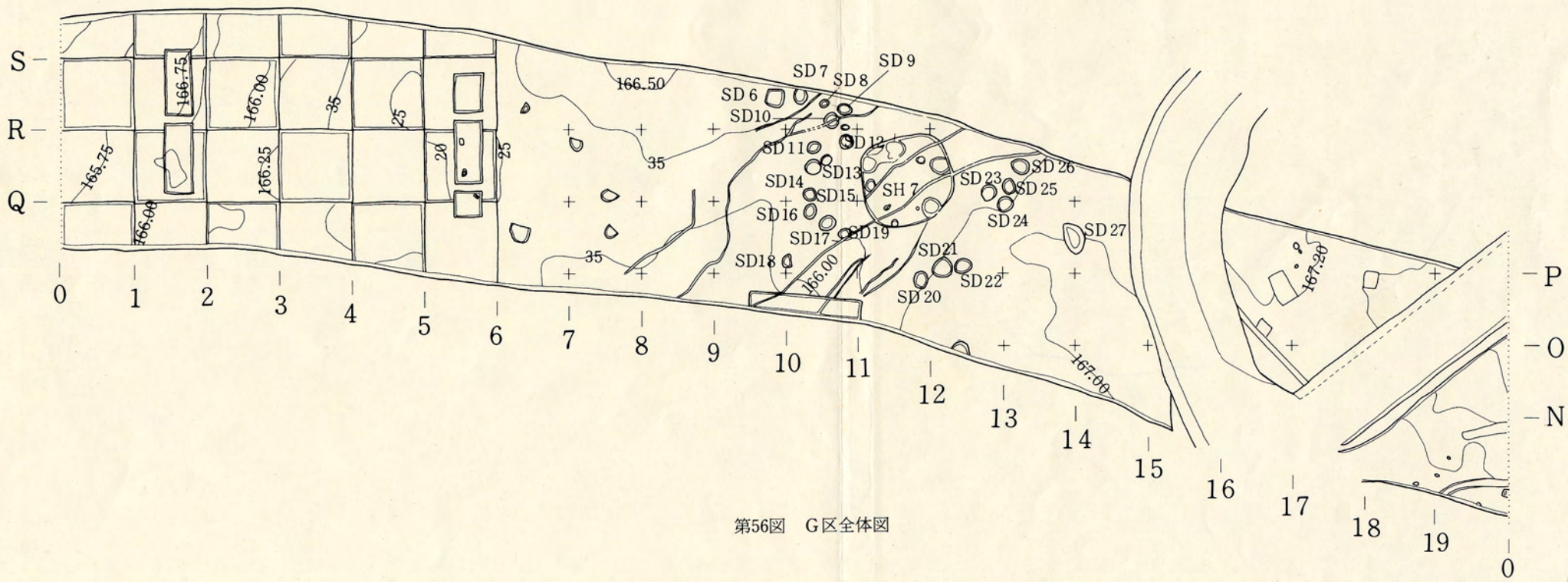
3.底部より直立気味に内湾する胴部下半より外反して開く



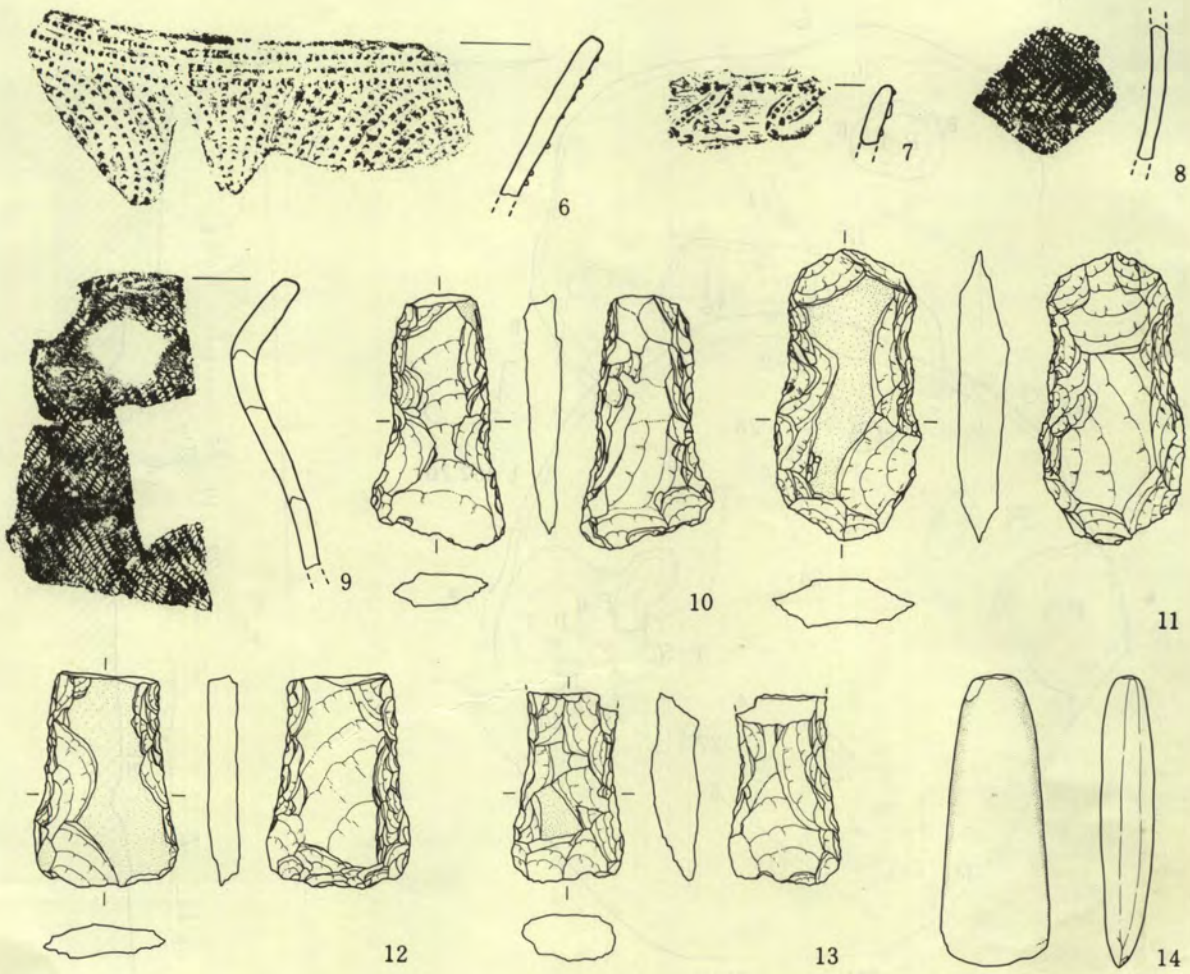
第54図　SH 2出土遺物(1)



第55図　F区全体図



第56図　G区全体図



第57図　SH 2 出土遺物(2)

胴部へ移行する。斜位に沈線文を集合させ貼付文を施す。2と同様の出土。

4．外反する平口縁の口縁部片と直線的に斜方向に伸びる胴部片である。放射肋の無いハマグリ等の二枚貝による波状貝殻文を胴部に施す。覆土中の出土である。浮島II式に比定されよう。

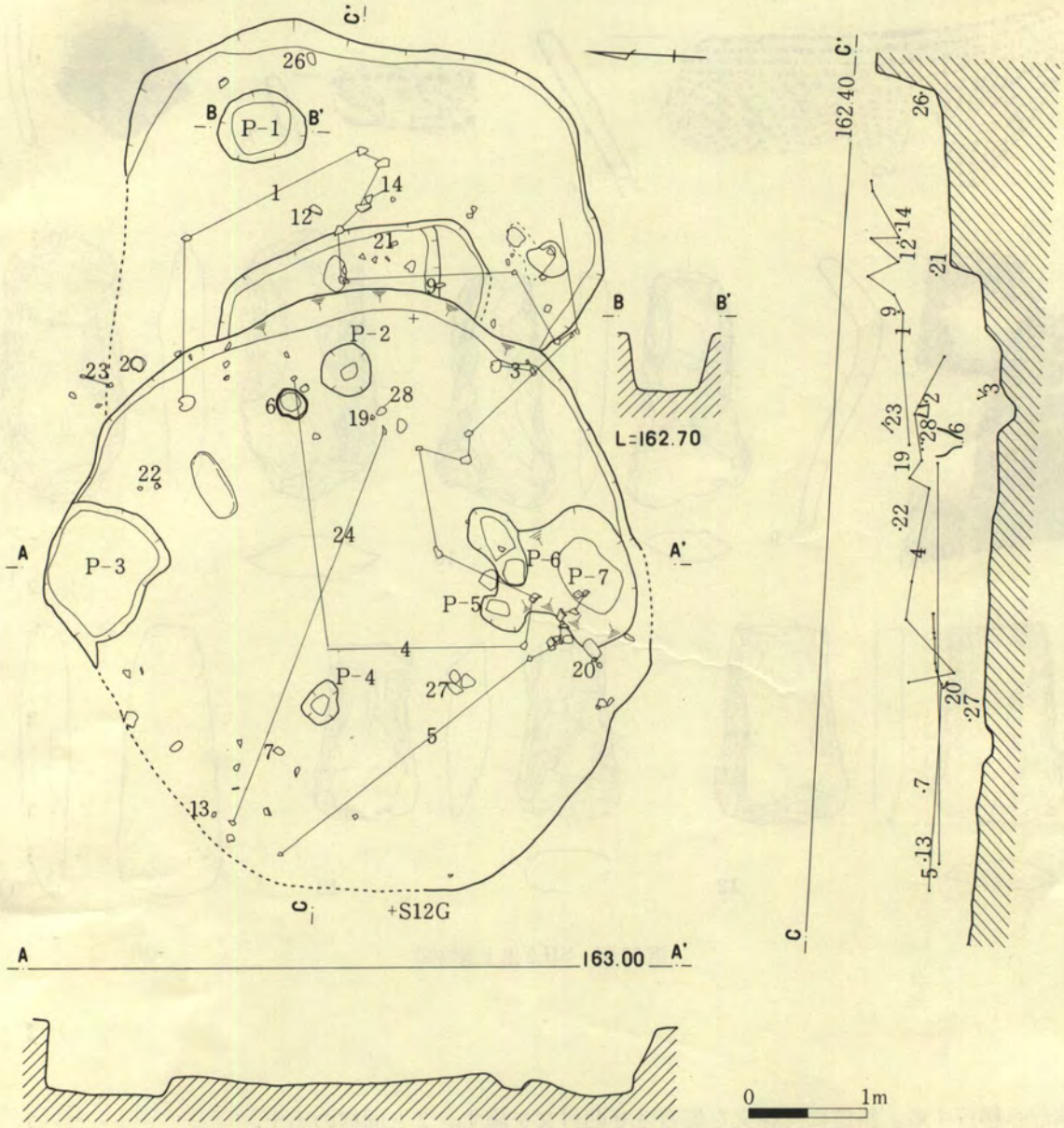
5．直線的に外反する胴部下半、内湾気味に外反する胴部中位、直立気味に外反する口縁部片で、同一個体と考えられる。口唇部に刻み目を施し、アナダラ属の貝殻で密な波状貝殻文を施す。浮島III式に比定されよう。

6．7は結節浮線文を施す口縁部片で、6は直線的に外反して開く大型の波状口縁部片で、波形に沿い三本一組の結節浮線文を並走させ下方に渦巻状気味に結節浮線文を貼付する。7は外反して開く口縁部片で外面口唇部端に結節浮線文を貼付し、それに接して木の葉文様を貼付する。

8．直立気味の胴部片で、RL と LR を交互して羽状気味に地文を施す。比較的薄手で砂粒を多く含む。

9．8と同一個体であろう。くの字状に屈曲する口縁部を呈し、胴部は口縁部径より張り出して内湾する。

10～12は打製石斧で、10、12、13は撥形、11は短冊形気味である。



第58図　SH 3、4 平面図

13は蛤刃の磨製石斧である。10～13は覆土中の出土である。

SH 3、4（第58図）

本住居址はF区12R、13R、12S、13 SG に跨がり検出された。SH 3は北西辺が斜面に吸収され、明確を欠くが平面形は直径5.05m前後の円形を呈し、掘り込みはやや緩慢で15cmほどの壁高を東壁で測る。床面はやや軟弱ではあるが平坦な面を残す。ピット状掘り込みはP-2、4～6の四ケ所に検出されたが、何れも5～15cmと浅い掘り込みであった。土坑状掘り込みP-3、7は南北辺の中央付近に位置し、相対気味の位置関係にある。P-3は北壁沿いに歪んだ方形気味のプランを呈し、北壁で60cmほどの壁高を測る。P-7は南壁沿いに楕円形に掘り込まれ、床面より20cmほどの深さを測る。

本住居址の炉址は検出されなかったが、P－2の北西部に正位に埋設した埋甕炉が存在した。

遺物出土状態はP－7西方に集中するが他は散在的な出土である。尚、P－2とP－3の間に長さ60cm、幅25cmの石が出土。立石と考えられる。

SH 4はSH 3の上方に位置し、北辺、西部辺が明確を欠く。南北長が4mほどを測る歪んだ隅丸方形のプランを呈するであろうか。掘り込みは東壁で55cmほどを測る。床面はSH 3と同様に軟弱で、西方にやや傾斜する。SH 3の東壁との間に方形状の掘り込みが認められる。北東部には長軸長70×短軸長60cmの楕円形を呈するP－1の掘り込みが伴う。深さは床面下50cmほどを測る。

本住居址の炉址も検出されなかったが、SH 3の北東部上面で、埋甕炉と考えられる土器が正位に埋設されている。

遺物出土状態は床面に伴う明確な遺物は無く、覆土中に散在的に出土した。

SH 3、4出土遺物（第59、60図1～28）

1．直立する胴部より大きく外反して開く。口唇部には大小のカマボコ状文を交互に、ボタン文を挟んで貼付する。口縁部は横位に充填し、縦位に棒状文とボタン文を交互に貼付する。胴部は沈線文を矢羽根状に集合させ、棒状文とボタン文を文互に貼付する。同一の個体と考えられる胴部片がSH－5より出土。

2．底部より直立気味に外反して胴部へ移行する。下半部は沈線文を横位に充填させ、上方には縦位と斜位で集合させる。残存部上方に短かい棒状文を貼付する。埋設炉であろうか？

3．外反して開く胴部下より直立して上方をやや縮める個体で、下部には素文部、横位に充填される沈線文帯が施され、上部には空白部を若干残して縦位、矢羽根状、縦位の曲線を沈線で集合させる。地文はRLである。

4．底部より直立気味に外反して胴部へ移行する。沈線文で矢羽根状文を横位に繰り返し、ボタン文を多く貼付する。

5．底部より直立気味に立ち上がり、上方に連れて徐々に外反する。沈線文により縦長に伸びる縦位帯を挟んで鋸歯文的に交互する四条一組の平行沈線文帯を斜位に施す。

6．すぼまり気味の胴部下半より外反して開き、内湾気味に直立する胴部上半より短かく外反する口縁部へ移行する。埋設炉として正位に出土。口唇部に鋸歯状の装飾帯を相対させて貼付し、装飾帯を含めて斜位～縦位の刻み目を貝殻腹縁に依る波状貝殻文で施す。胴部にも同様の貝殻文を横位等に並走させて施し、間隔をもつ三条一組の平行沈線文帯を口唇部下と胴部に設け、空間部に鋸歯状の文様を描く。

7．内湾気味に直立する口縁部片で、口唇部に指頭圧痕を連続させる。RLの地文を充填する。

8．9．同一個体片で、平行沈線文により斜格子文を施す。

10．沈線文による斜格子文と縦位文を施す胴部片である。

11．12．17．18．細平行沈線文を施す口縁部と胴部片で、18はくの字状に強く屈曲する口縁部片である。

13．爪形文を伴う平行沈線文と刻み目を交互する胴部片である。

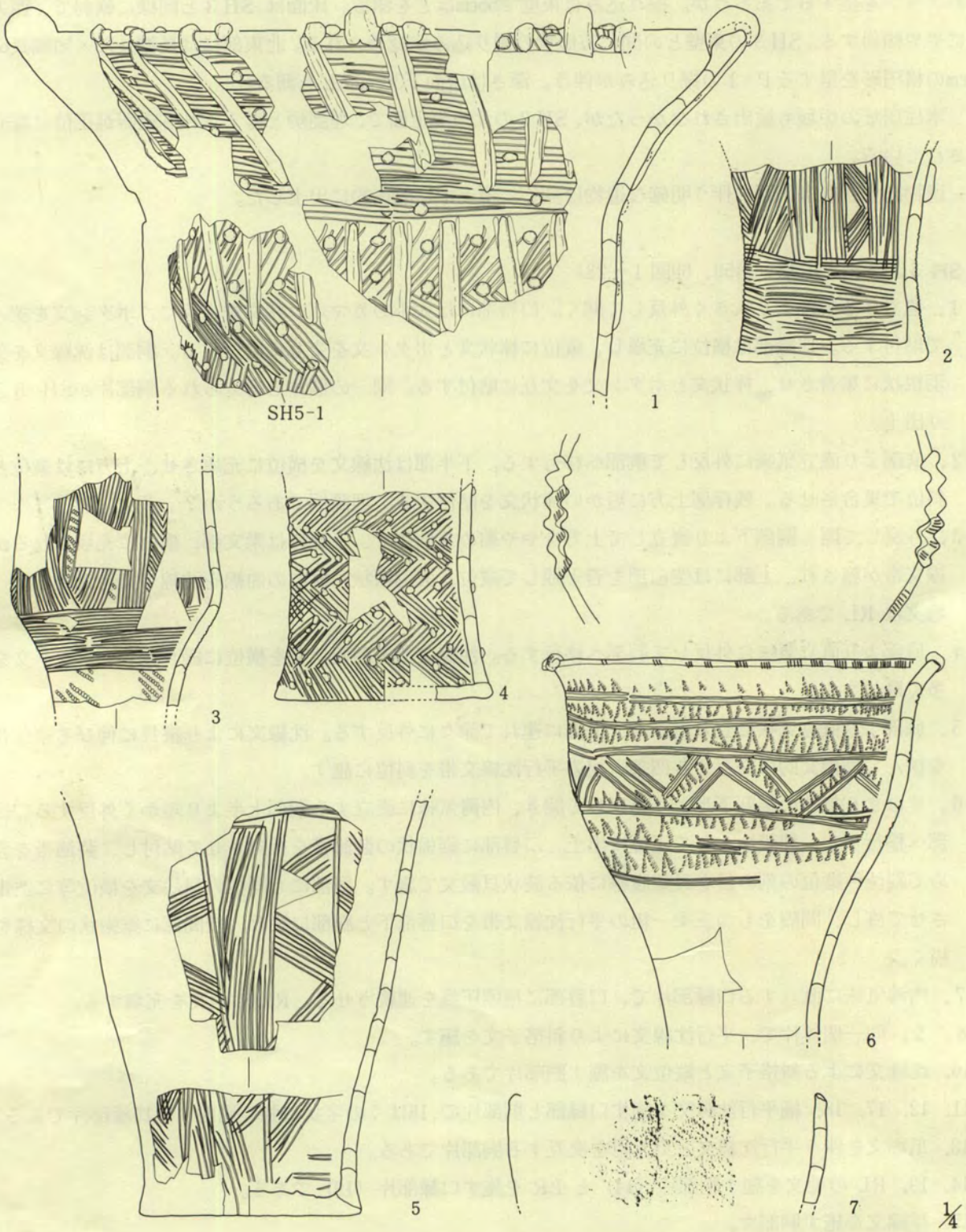
14．19．RLの地文を施す胴部片（14）とLRを施す口縁部片（19）である。

15．浮線文を施す胴部片。

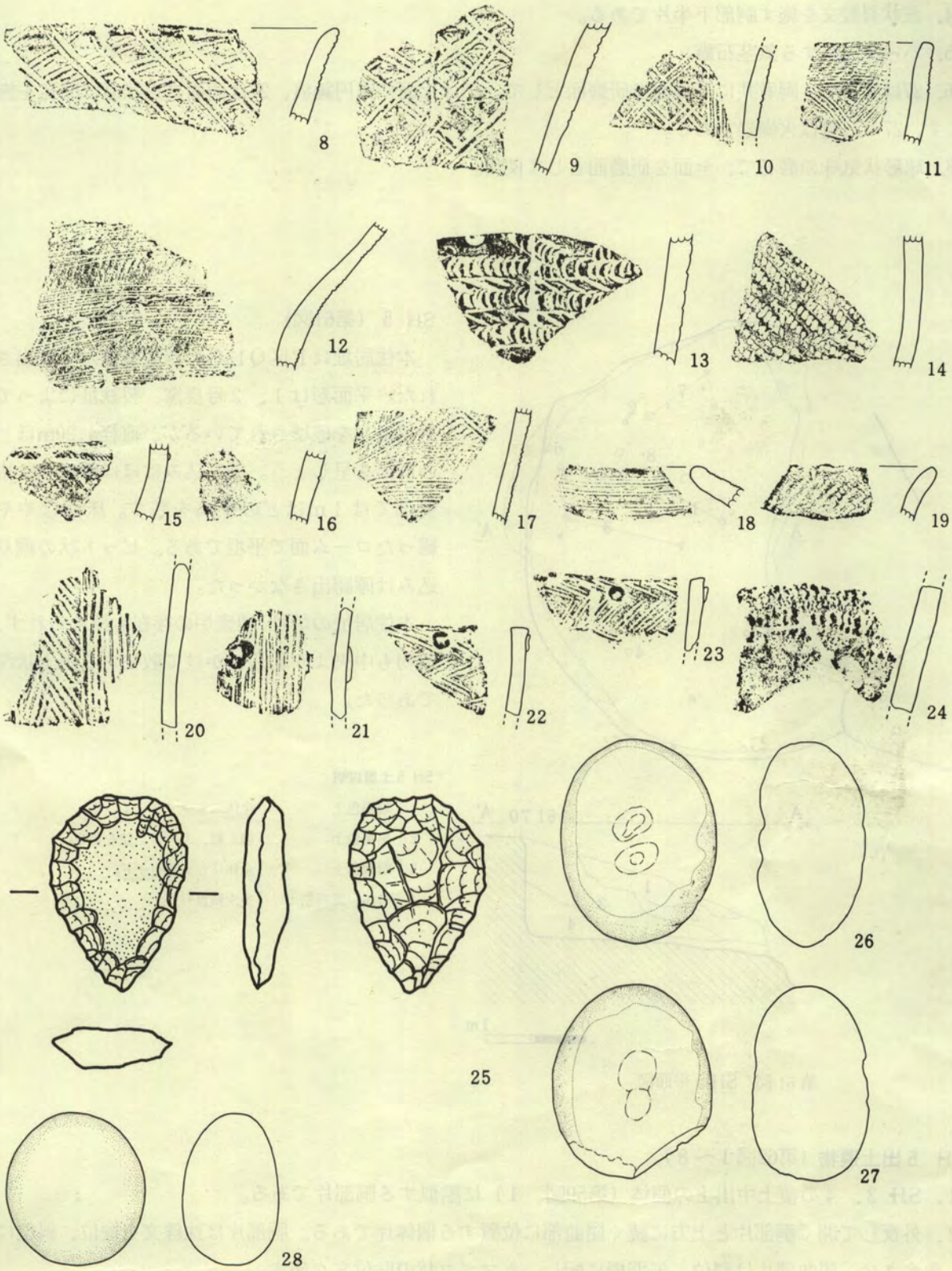
16．爪形文を挟む平行沈線文を施す。

20. 21. 集合する沈線文を施す胴部片で、21には刺突を施すボタン文が貼付されている。

22. 23. 同一個体の口縁部片で、矢羽根状に沈線文を集合させ、刺突を施すボタン文を貼付する。



第59図　SH 3、4 出土遺物(1)



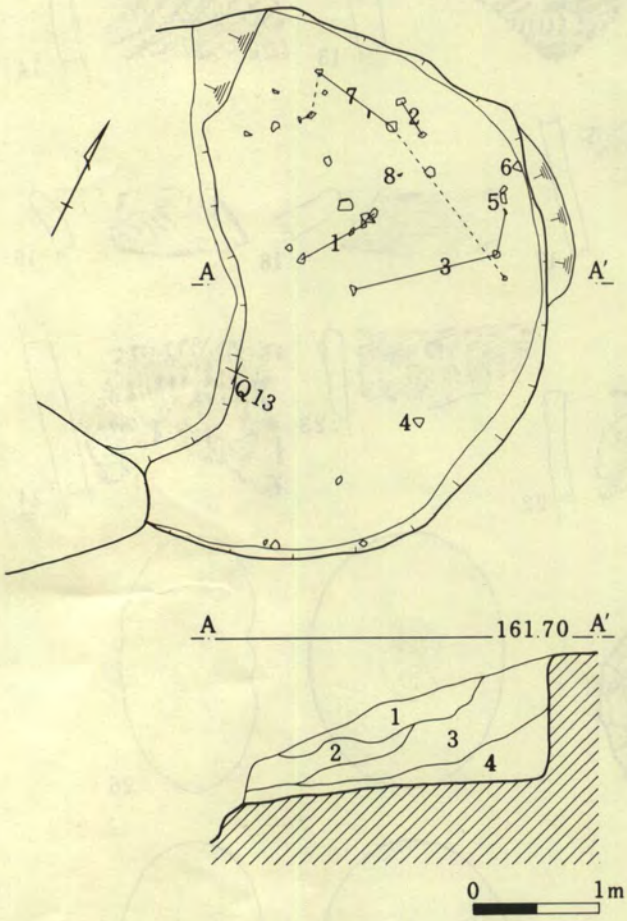
第60図　SH 3、4出土遺物(2)

24. 波状貝殻文を施す胴部下半片である。

25. ハートを呈する無茎石鏃。

26. 27は磨石で、両者共に表裏面を研磨面として、26は片面に逆円錘痕、27は両面に点状痕で凹孔を施す。27の石質は火崗岩である。

28. 球形状気味の磨石で、全面を研磨面として使用。



第61図　SH 5平面図

SH 5（第61図）

本住居址はF区Q13Gの西辺を挟んで検出された。平面形は1、2号炭窯、製鉄址によって約⅓ほどを破壊されているが、直径4.20mほどの円形を呈しょう。掘り込みはほぼ垂直で、東壁部では1mほどの壁高を残す。床面はやや締ったローム面で平坦である。ピット状の掘り込みは確認出きなかった。

本住居址の炉址、埋甕炉の存在も認められず、遺物も中央より北辺にかけて散在する出土状況であった。

SH 5土層説明

1	暗褐色土	全体にサラッとしている。
2	黒褐色土	焼土粒、カーボン粒を含む。
3	暗褐色土	全体にしまりハード。
4	にぶい黄褐色土	多少粘質有り。

SH 5出土遺物（第62図1～8）

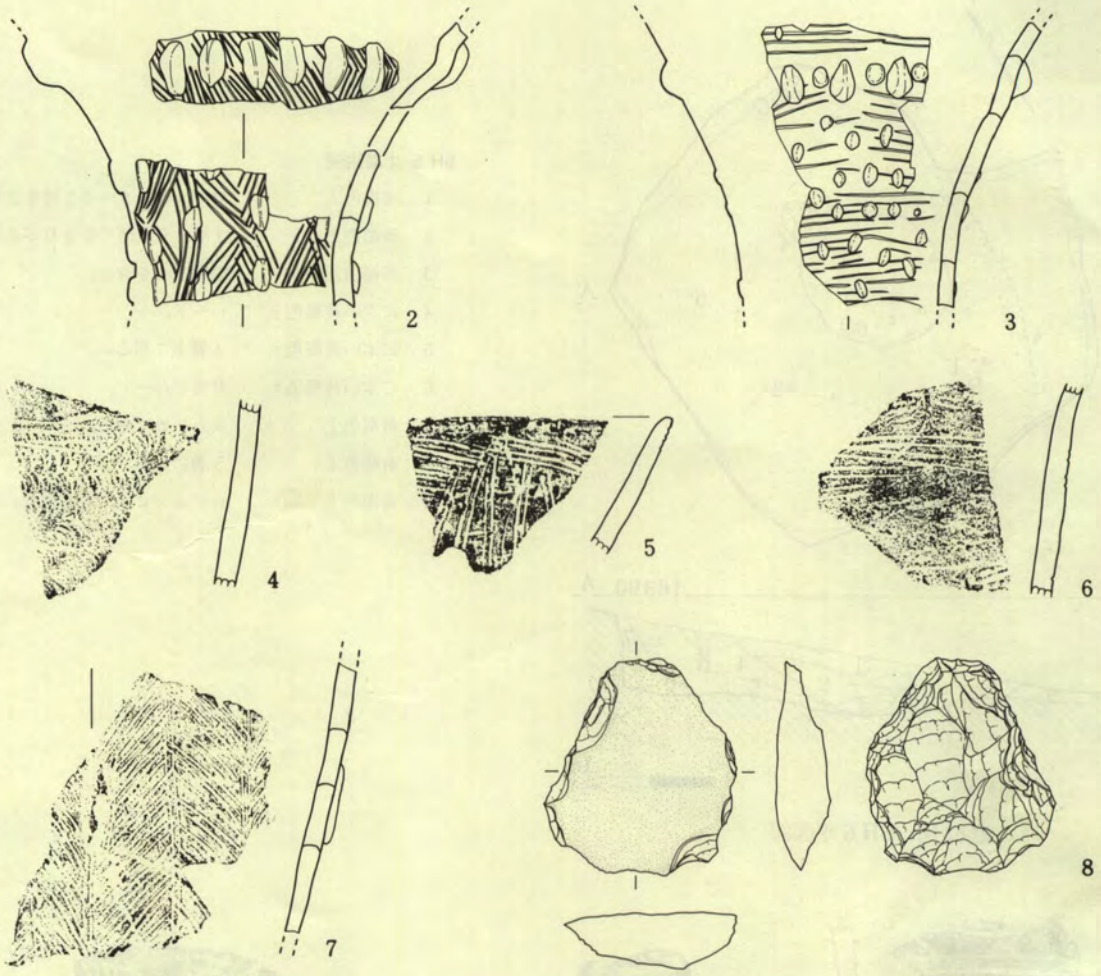
1. SH 3．4の覆土中出土の個体（第59図、1）に酷似する胴部片である。

2. 外反して開く胴部片と上方に続く屈曲部に位置する個体片である。胴部片は沈線文を縦位、斜位に集合させ、屈曲部片は斜位、矢羽根に配し、カマボコ状の貼付文を施す。

3. 胴部より外反して開く個体で、横位に沈線文を粗に施し、豆粒状文、ボタン状文を貼付する。

4. 波状貝殻文と沈線文による施文の胴部片である。波状貝殻文は放射肋の無い小型の二枚貝によるもので密に施す。

5. 直立気味に外反する口縁部片で（(図版修正）補修孔を設ける。沈線文を口唇部下に横位気味、縦位



第62図　SH 5出土遺物

気味に施す。

6．直線的に外反し、上部でさらに外反を強める胴部片で、沈線文を施す。

7．やや内湾気味に外反して開く個体で、沈線文によりほぼ等間隔の縦位区画を描き、空間部を斜位に走らせ矢羽根状とする。縦位の沈線文上の一部に棒状文貼り付けを施す。

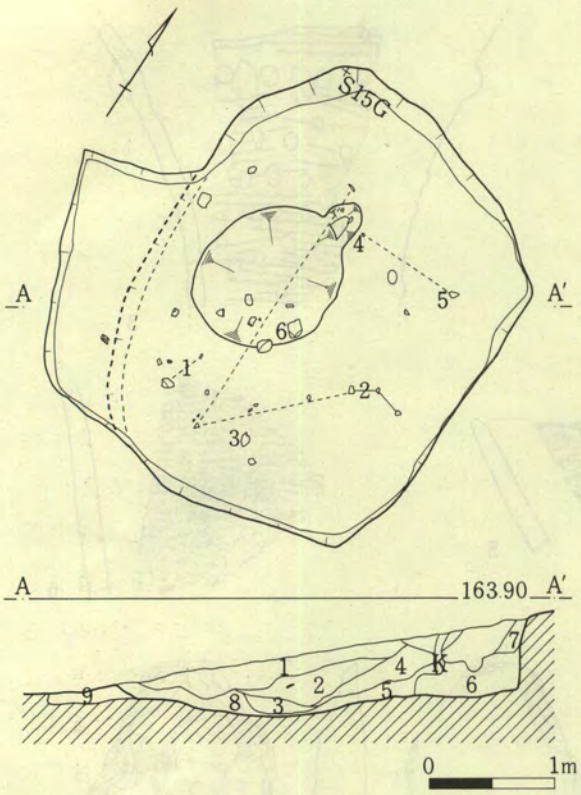
8．貢岩の削器で、片面の大半が自然面をもつ。

SH 6（第63図）

本住居址はＦ区Ｑ15Ｇにその大半を占めて検出され、生産址が構築された斜面から平坦部へ移る変化点付近に位置する。長軸がほぼ真北を呈し、長軸長3.5×短軸長2.75mを測る方形気味のプランで、北西部がやや突出する。掘り込みは垂直気味で残存の良い北東コーナー部で壁高60mほどを測る。床面は多少起伏を呈し、中央やや西寄に浅い皿状の窪みを設ける。ピット状の掘り込み、炉址等の施設は確認できなかった。

遺物出土状態は、覆土中より少量の破片が検出された。

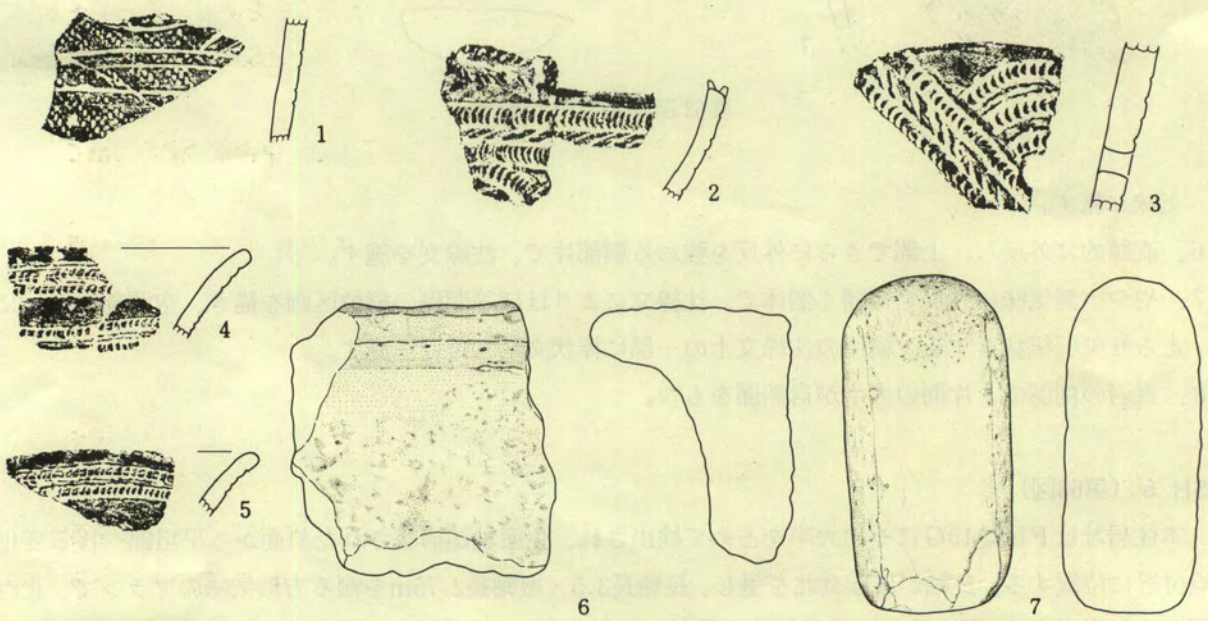
SH 6　出土遺物（第64図１～７）



SH 6 土層説明

1	暗褐色土	ローム粒、カーボン粒を含む。
2	暗褐色土	1層よりも暗くしまりがよい。
3	黒褐色土	暗褐色土を含む。
4	にぶい黄褐色土	ハード。
5	にぶい黄褐色土	4層より明るい。
6	にぶい黄褐色土	非常にハード。
7	黄褐色土	スカスカである。
8	黄褐色土	5層に似る。
9	黄褐色土	ロームブロック粒を含む。

第63図　SH 6平面図



第64図　SH 6出土遺物

1．直線的にやや外反する胴部片でRLの地文を施す。沈線文を横位、曲線的に走らす。

2．内湾して開く口縁部片で口唇部に細長いリング状の突起を付し、刻み目を施す。口唇部下に刻み目

を挟んで横位に並走する爪形文帯が廻り、下方に曲線文を描く。

3．直線的に外反する胴部上半片で刻み目を挟んで爪形文帯を斜位に施し、空間部に爪形文を伴う平行沈線文を三条一組で弧文を描く。貫通孔が設けられている。

4．5は同一個体の口縁部片で、外反して開く。口唇部下に横位に並走する爪形文を伴う平行沈線文を二条一組で無文部を挟んで二組廻る。

6．中央やや西寄りの窪地で出土した石皿片で、石質は安山岩である。

7．縦長の石鹸形の磨石で、表裏側面の四面を研磨面とする。石質は石英粗面岩である。

SH 7（第65図）

本住居址はG区P11、Q11Gにその大半を占め、F区の住居址群と隔り、平坦部に一軒孤立した状態で検出された。平面形は東西、南北長がほぼ6mを測る隅丸方形で、各辺の中央部が張り出し気味である。本住居の北東部より南西部にかけて、幅1.7～2.5mで地割れが並走し、この間の床面が15～45cmほど陥没する。掘り込みは床面よりやや開口気味で、55～70cmほどの壁高が残存する。床面は中央部から南東部の範囲に硬く締まったローム面が検出された。ピット状、土坑状の掘り込みはP－1～10まで10ヶ所検出し、P－2、7～10がピット状、P－1 3～6が土坑状の掘り込みを呈した。P－1は東壁中央やや北寄りに位置し、断層内にその形状がすっぽり入る。規模は長軸長1.3×短軸長1.2mの隅丸形状で深さ1.35～1.45mを測る。P－2は50cmほどの円形気味プランを呈し、55cm前後の深さである。P－3は、1.5～1.6mほどの円形で床面より70cmほどの深さで、P－4は北東隅に位置し、長軸長1.3×短軸長1.2mの楕円形で、90cm前後の深さである。P－5は80～90cmの円形プランで90cm前後の深さである。P－6は南東部に位置し、長軸長1.35×短軸長1.2mの楕円形気味プランで80～90cmの深さを測る。P－7～9は35～40cmほどの楕円形、円形プランを呈し15～20cmの深さである。P－10は50～55cmほどの円形で70cmほどの深さである。

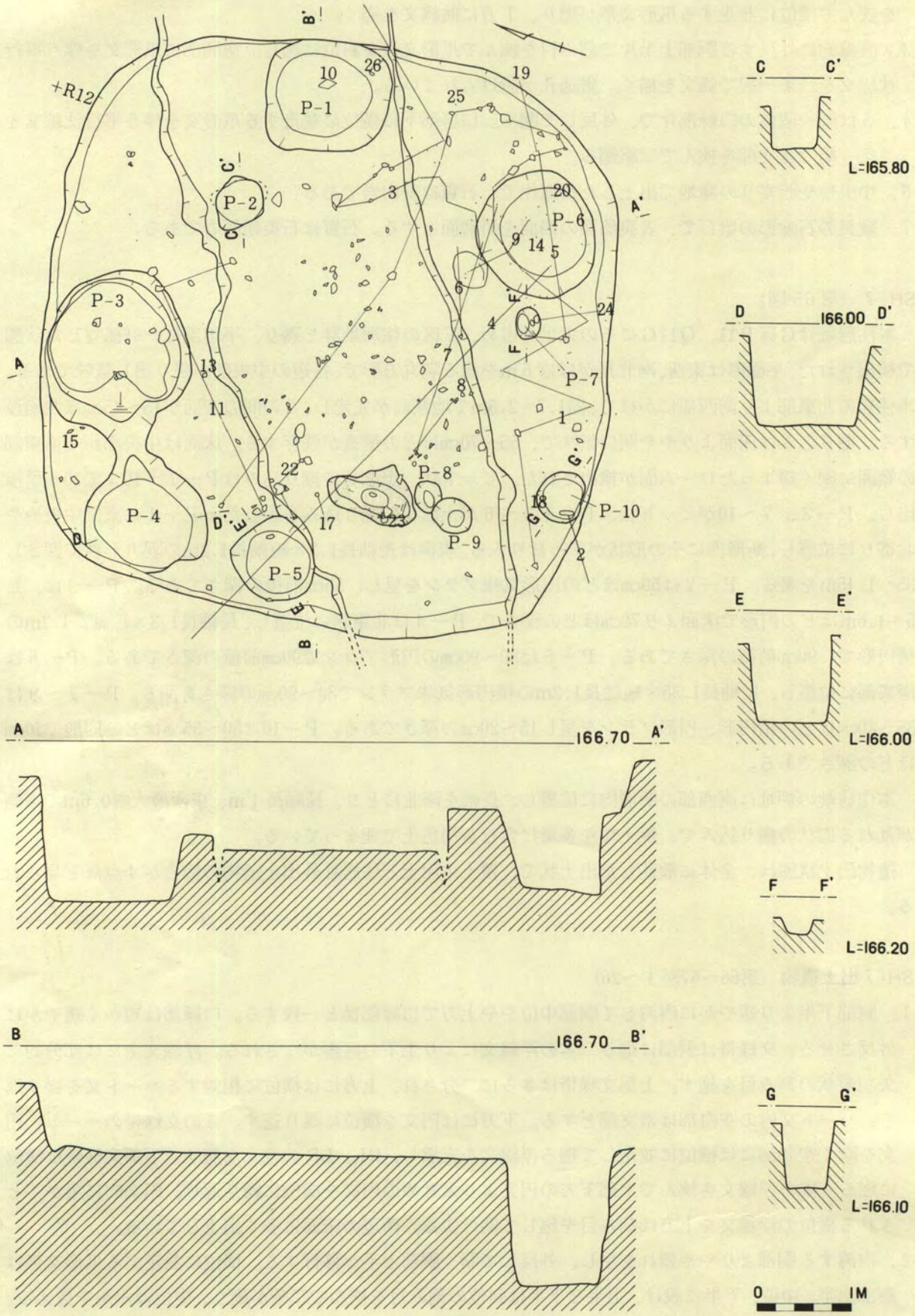
本住居址の炉址は南西部の断層内に位置し、長軸を南北にとり、長軸長1m、東西最大幅0.6mで東側が乱れる皿状の掘り込みで、焼土粒を多量に含む黄褐色土で埋まっている。

遺物出土状態は、全体に散乱した出土状で、覆土中出土と住居址外出土遺物の接合が4点ほど見られる。

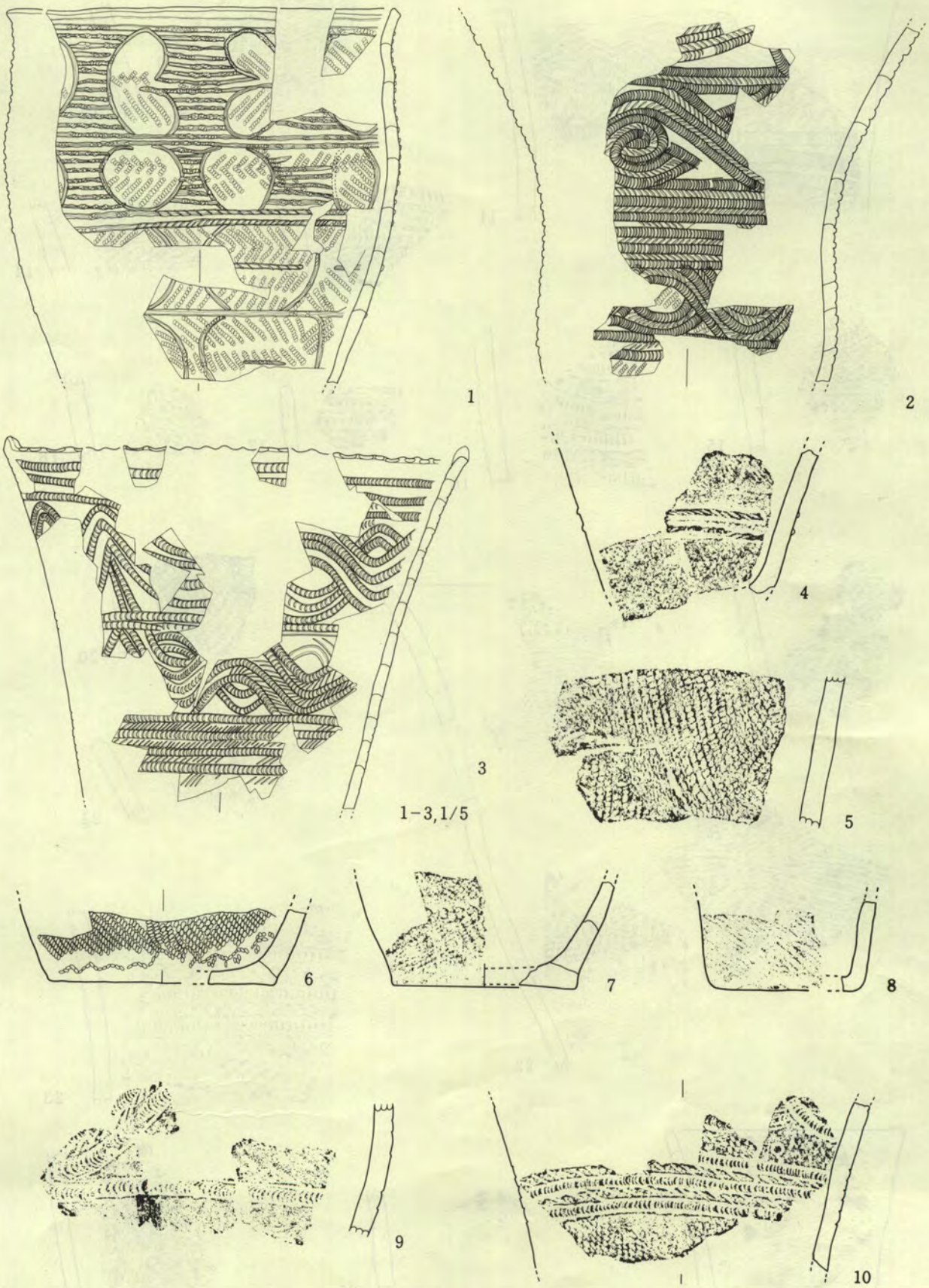
SH 7出土遺物（第66～67図1～26）

1．胴部下半より緩やかに内湾して胴部中位やや上方で口縁部径と一致する。口縁部は短かく緩やかに外反させる。文様帯は胴部に廻る二本の浮線文により上下の区画がなされる。浮線文上には部分的に矢羽根状の刻み目を施す。上部文様帯はさらに二分され、上方には横位に相対するハート文を繰り返し、ハート文内の空白部は素文部とする。下方には円文を横位に繰り返す。この文様帯のハート、円文を除く空間部には横位に並走して廻る浮線文を充塡し、RL、LRの地文を施す。下部文様帯は横位に廻る一本の浮線文を挟んで上部下方の円文より大きめの円文を横位に繰り返し、円文的に短かくとぎれる横位の浮線文を上方は刻み目を施して貼付する。南辺の床面に多く出土している。

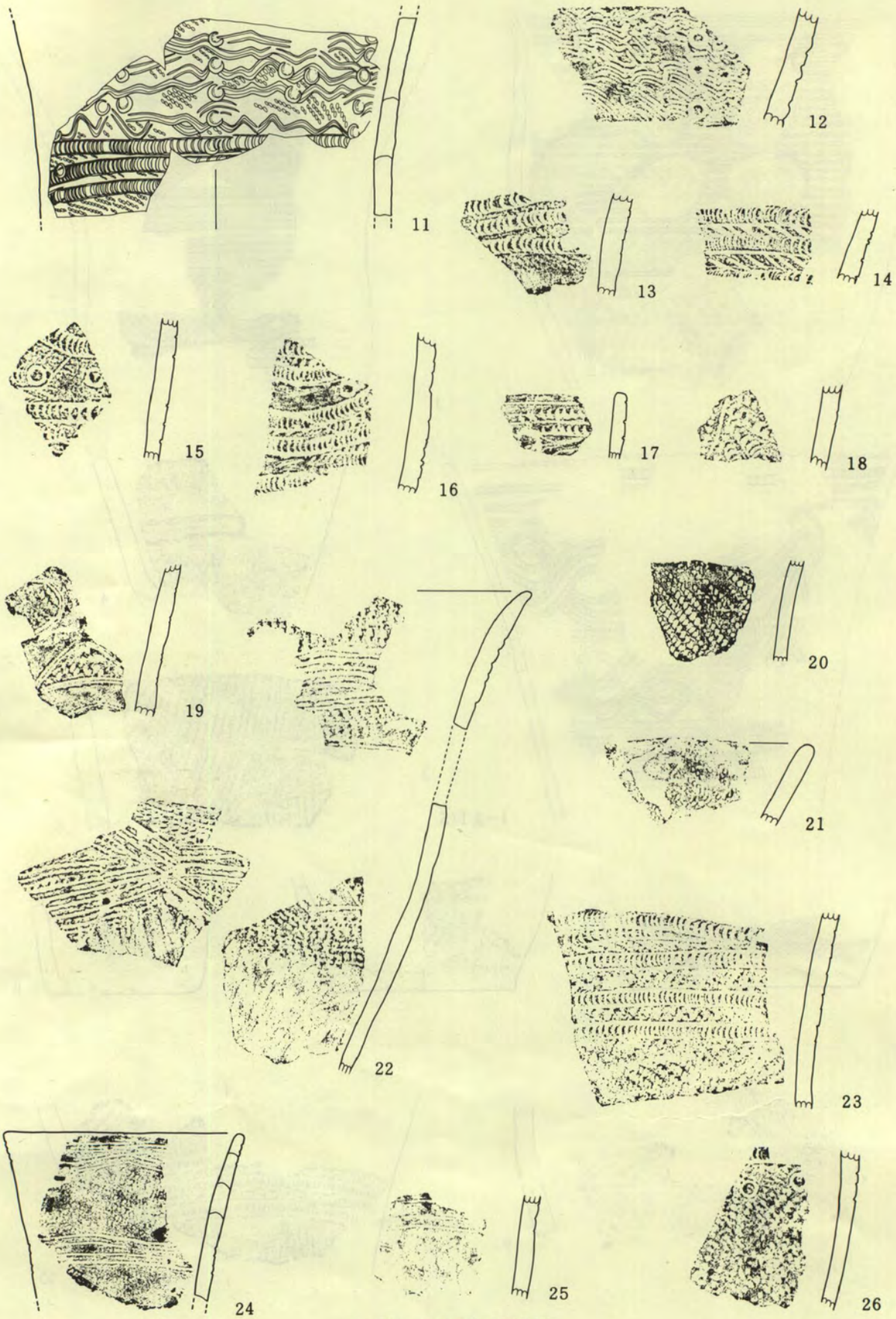
2．内湾する胴部よりやや頸れを呈し、外反して開く胴部上半へ移行する。横位に並走する爪形文帯は胴部上半、中位、下半に設け、上半と下半は斜位の刻み目を挟んで二条が廻り、中位は六条を数える。爪形文帯間は渦巻、波状文等が施される。地文はLRである。P－10上面と住居址外の接合個体である。


+R12
P-1
P-2
P-3
P-4
P-5
P-6
P-7
P-8
P-9
P-10
A
A'
B
B'
C
C'
D
D'
E
E'
F
F'
G
G'
166.70
166.00
L=165.80
L=166.00
L=166.20
L=166.10
0
1M

第65図　SH 7 平面図



第66図　SH 7出土遺物(1)



第67図　SH 7出土遺物(2)

3．直線的に口唇部まで開く深鉢で、口唇部に小突起を付し、指頭圧痕を連続させる。口唇部下に三条胴部上半に二条、中位に斜位の刻み目を挟んで四条一組の爪形文帯を横位に廻らし、爪形文帯間に交差する波状文を充塡させる。南東部床面と住居址外の接合個体である。

4．6～8は底部～胴部下半の破片で、4は浮線文を廻らす。

5．20．21はRL の地文を施す口縁部と胴部片である。

9．10．13～18．23．26は爪形文帯を施す胴部と口縁部片である。23は炉址上面の出土。

11．12は文様帯に波状文と円形刺突文を施す。

19．平行沈線により三角文、楕円文？を施す。磨消縄文を伴う。

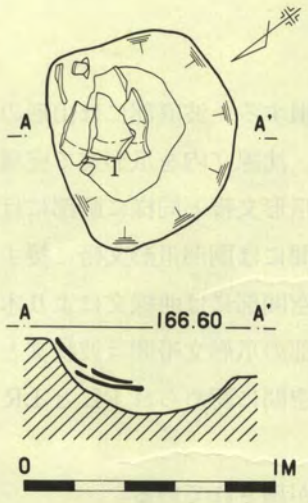
22．興津II式に比定される深鉢の口縁部と胴部片である。アナダラ属貝殻の腹縁文により胴部下方まで充塡し、平行沈線文で菱形等の区画を描く。P－5東方に出土。

24．25は同一個体片と考えられる。口唇部下と胴部に二条一組で平行沈線文を廻らす。

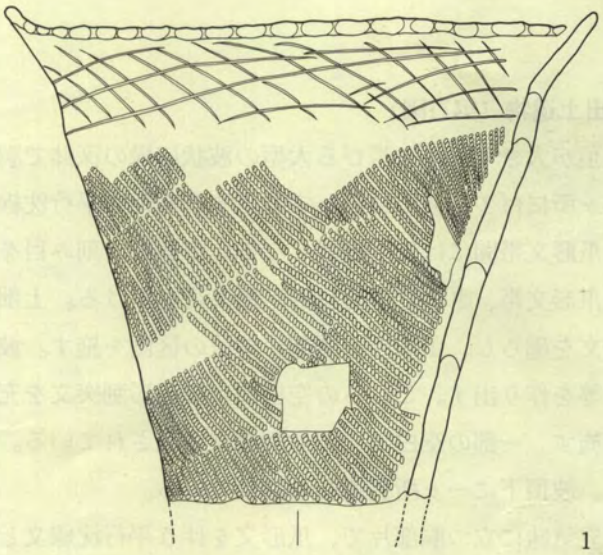
FG 区土坑（第68～103図）

SD 5（第68図）

F区R14Gに検出され、生産址群の斜面上方に位置する。北辺、東辺が直線気味となる隅丸方形状のプランを呈し、浅いボール碗状の掘り込みである。北東寄りに土器が集中出土。



第68図　SD 5 平面図



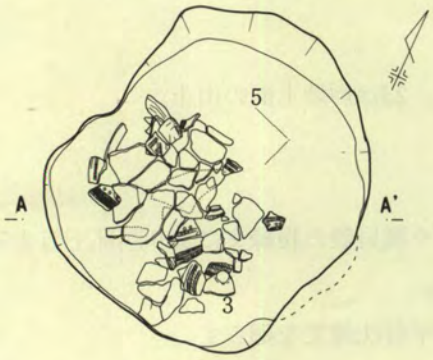
第69図　SD 5 出土遺物

SD 5 出土遺物（第69図）

1．直線的にラッパ状に外反する胴部より弱くくの字状を屈曲し、外反して開く口縁部へ移行する。山形の小突起を付す。口唇部には指頭圧痕を連続させ、口唇部下には沈線文で斜格子文を描く。頸部下

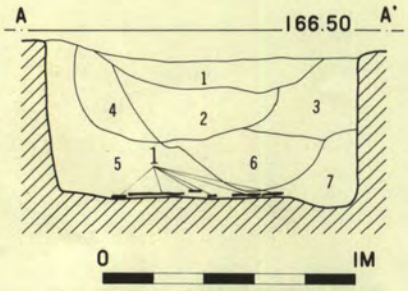
方は素文部となり条の長い RL の地文を充塡する。

SD 6（第70図）



SD 6 土層説明

1	暗褐色土	カーボンローム粒を含む
2	黒褐色土	カーボンローム粒を含む
3	にぶい黄褐色土	ローム粒と少量のロームブロック粒を含む。
4	にぶい黄褐色土	3層に似るが暗い。
5	にぶい黄褐色土	粘質帯びる。
6	にぶい黄褐色土	ローム粒を含む。
7	にぶい黄褐色土	5層に似る。



第70図　SD 6 平面図

SH 7を取り巻く環状土坑群の北西部、G区R 9 Gに検出。長軸がN－11°－Eを呈し、長軸長1.35×短軸長1.41mを測る。北壁中央部がやや張り出す方形プランで、東壁部が抉れるが他壁は垂直気味の掘り込みで、深さ60cm前後を測る。

遺物出土状態は、大形の波状口縁を呈する深鉢片が底面に密着して出土。他は覆土中より浅鉢形土器、爪形文、浮線文を伴う土器類が出土した。

SD 6 出土遺物（第71図）

1．波頂が大きく丸味を帯びる大型の波状口縁の深鉢で胴部下半を欠損する。波底部には山形の小突起を二ヶ所に付す。波形に沿って並走する四条の平行沈線文を廻らし、沈線文内を爪形文で充塡する。この爪形文帯間には矢羽根状となるよう斜位の刻み目を施し、口縁爪形文帯と同様に胴部には五条一組の爪形文帯、さらに下方にも爪形文帯を設ける。上部の爪形文帯間には胴部爪形文帯に接する様に波状文を廻らし、山形の空間部に縦位の区画を施す。波状文の上方空間部には曲線文により木の葉状区画等を作り出す。これらの空白部には円形刺突文を充塡する。下部の爪形文帯間は波状文と縦位文等を施す。一部の空白部に円形刺突文が施されている。地文はこの空間に認められ RL と LR を交互する。波頂下に一ヶ所貫通孔を設けている。

2．直立気味に立つ胴部片で、爪形文を伴う平行沈線文と円形刺突文が施されている。

3．底部より内湾する胴部へ移行する。羽状縄文を施す。

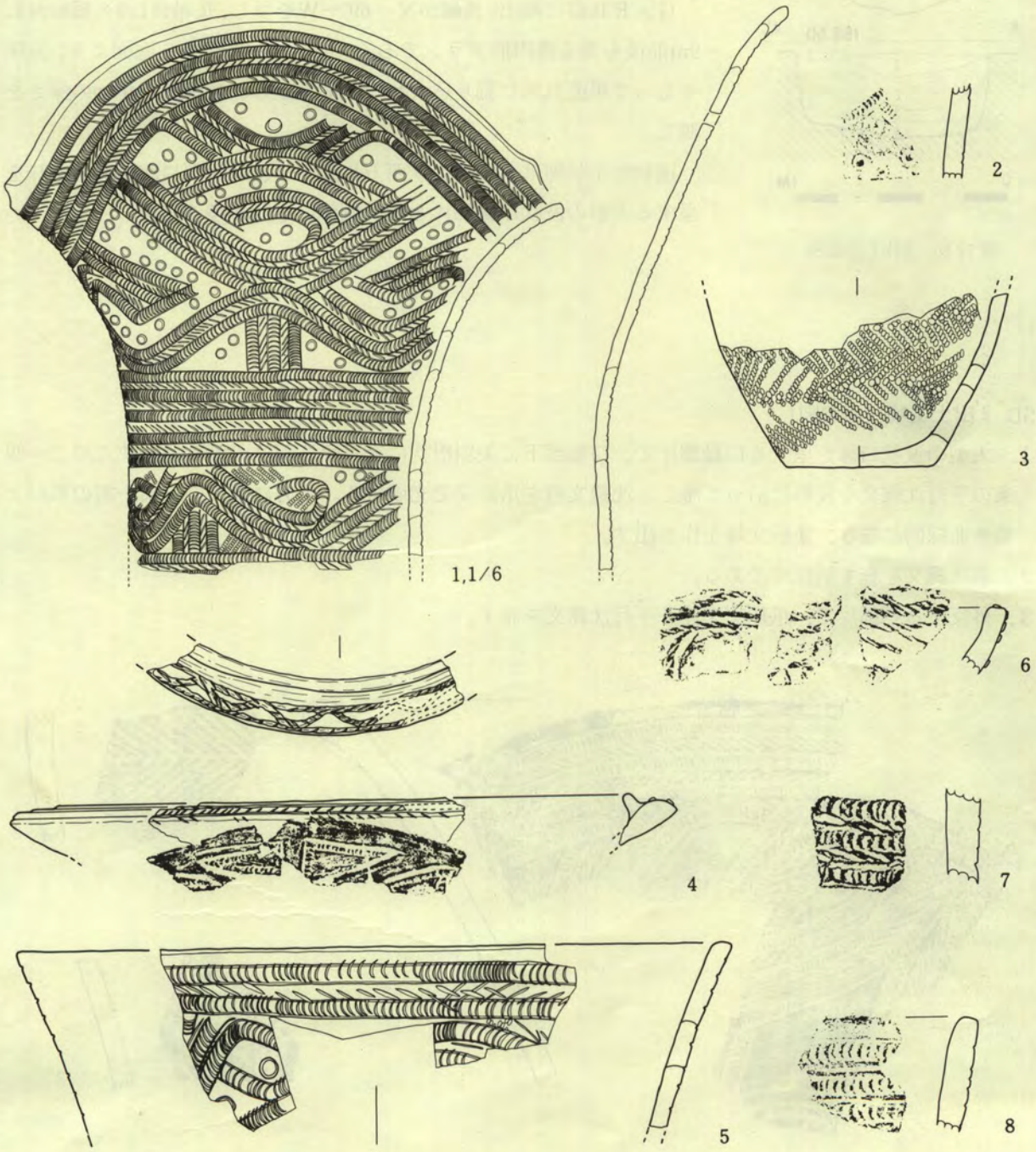
4．浅鉢形土器の口縁部片で、口唇部内面に角先状隆帯を廻らし、隆帯と口唇部端の間に並走する二本の浮線文を貼付し、その間を鋸歯文的に浮線文を施す。口唇部外面端に一条の沈線を設け、沈線文を挟んで矢羽根状刻み目を施す。口唇部下には平行沈線文によって相対する三角文等を描き、沈線文内を爪形で充塡する。

5．直線的に外反して開く平口縁の深鉢片である。口唇部下に刻み目を挟んで並走する爪形文を伴う二条の平行沈線文が廻る。下方には曲線文が描かれ、空間部に円形刺突文を施す。

6．外反して開く同一個体の口縁部片で浮線文を伴う。

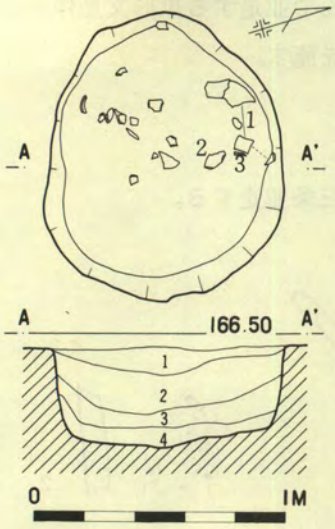
7．斜位の刻み目と爪形文を伴う平行沈線文が交互する胴部片である。

8．直線的に外反する口縁部片で、口唇部下に爪形文を伴う平行沈線文が三条並走する。



第71図　SD 6出土遺物

SD 7（第72図）



第72図　SD 7 平面図

SD 7 土層説明

1	暗褐色土	ハードで、少量のカーボン粒、焼土粒、ローム粒を含む。
2	暗褐色土	焼土粒、カーボン粒を多く含む。
3	にぶい黄褐色土	暗褐色土、カーボン粒を含む。
4	にぶい黄褐色土	粘質土で、ロームブロック粒を含む。

G区R10Gに検出。長軸がN－69°－Wを呈し、長軸長1.5×短軸長0.9m前後を測る楕円形プランである。凹凸面が多少ある底面より、丸味をもって垂直気味に掘り込まれた壁面を呈し、最深部で40cmの深さを測る。

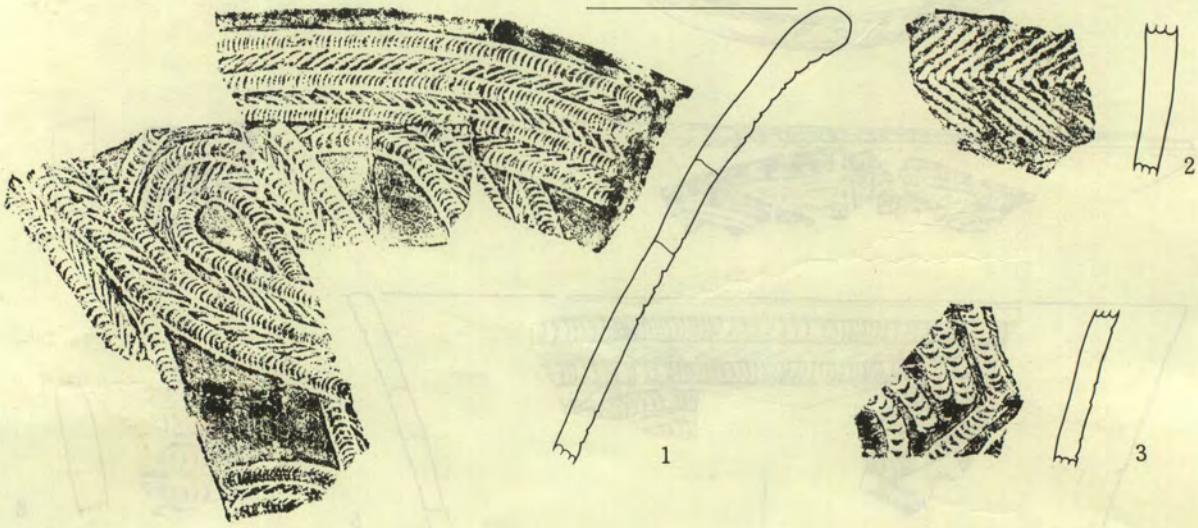
遺物出土状態は、中央より西方に集中し、北西部に波頂部が丸味を呈する大形の波状口縁部片と同一個体の小片が多く出土。

SD 7 出土遺物（第73図）

1．大型の波状口縁を呈する口縁部片で、口唇部下に矢羽根状に交互する斜位の刻み目を挟んで三～四条の平行沈線文を波形に沿って施し、沈線文内を爪形文で充填する。下方には二～三条一組の爪形文帯を曲線的に描き、菱形文等を作り出す。

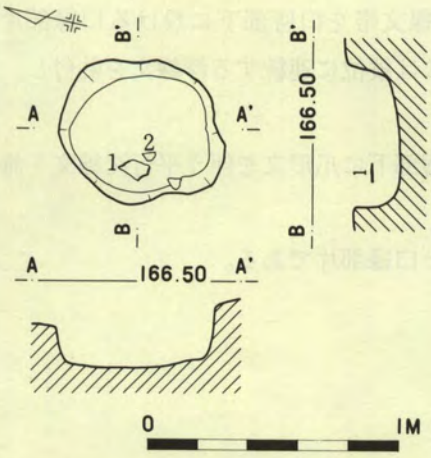
2．羽状縄文を施す胴部片である。

3．外反する胴部片で、爪形文を伴う平行沈線文を施す。



第73図　SD 7 出土遺物

SD 8（第74図）



第74図　SD 8 平面図

G区R10Gに検出され、東方にSD 9、西方にSD 7が位置する。長軸がN－12°－Eを呈し、長軸長1.35×短軸長1.15mの歪んだ楕円形を呈する。検出面より20cmほどの深さを測る。覆土中より小片が三点出土。

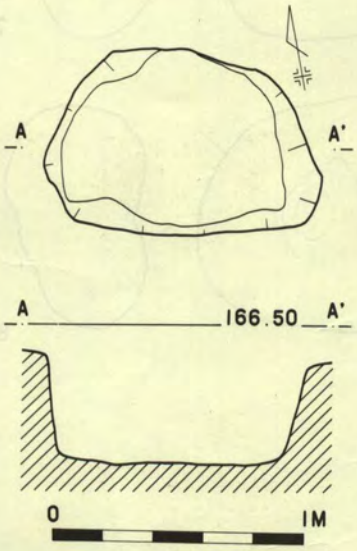
SD 8出土遺物（第75図）

1．2は胴部片で、1はLR、2はRLの地文を施す。

3．直線的に外反する口縁部片で、緩やかな波状口縁を呈す。口唇部下に並走する爪形文を施す。

第75図　SD 8 出土遺物

SD 9（第76図）



第76図　SD 9 平面図

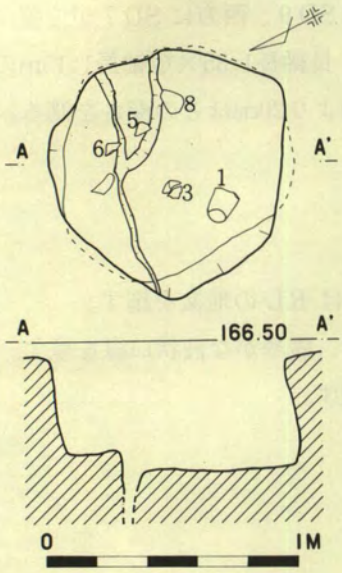
G区R10Gに検出され、東方にSD 9、西方にSD 7が位置する。長軸がN－12°－Eを呈し、長軸長1.08×短軸長0.93mを測る南西部が突出する歪んだ楕円形気味プランで、40cm前後の深さを測る。出土遺物はない。

SD 10（第77図）

G区R10Gに検出され、北東部にSD 9が隣接する。プランは0.9～1mを測る歪んだ円形気味を呈する。本土坑内を北東～西南西方向に走る地割れが通過し、8cmほどの差で底面がずれを生じている。掘り込みは西方と東方壁を除きやや抉れ気味となり、40～45cmほどの深さを測る。遺物出土状態は底面より磨石、浮線文土器の小片が検出され、他は覆土中の出土である。

SD 10出土遺物（第78図）

1．底部より丸味をもって立ち上がり、直線的に外反する胴部へ移行する。残存部上位に爪形文を伴う平行沈線文を二条一組で横位に並走させ素文部にRLの地文を施す。



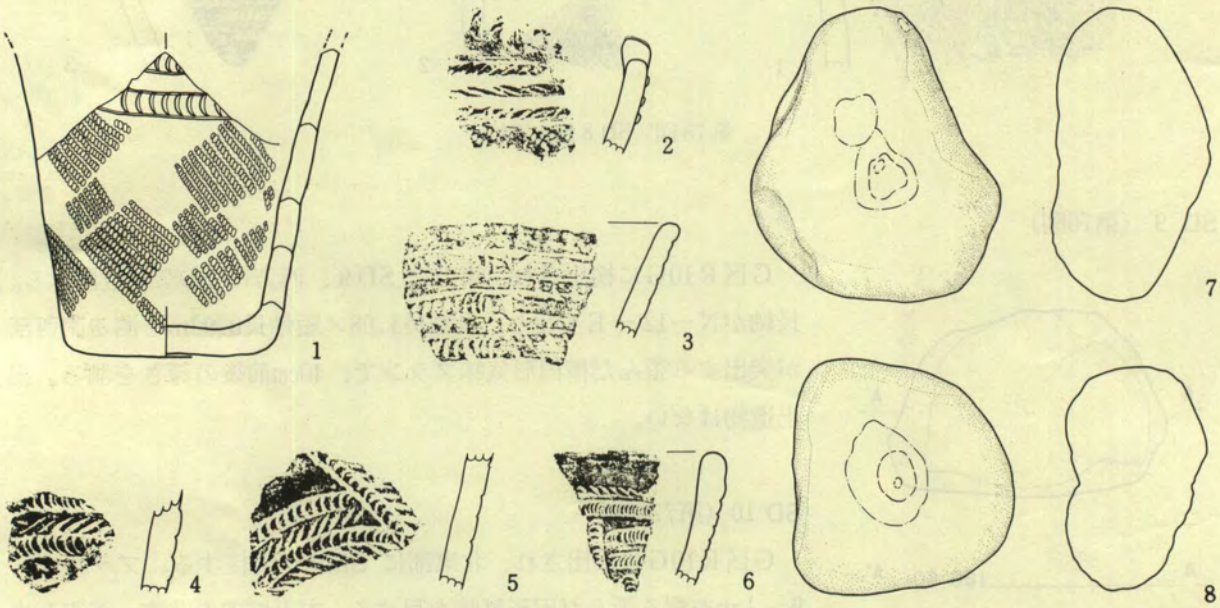
第77図　SD10平面図

2．二本一組で横位に並走する浮線文帯を口唇部下に設ける口縁部片で、波状口縁となろう。口唇部には縦位に連続する浮線文を貼付し、浮線文上に刻み目を施す。

3．外反して開く口縁部片で、口唇部下に爪形文を伴う平行沈線文を施す。

4．5．6は爪形文土器の胴部片と口縁部片である。

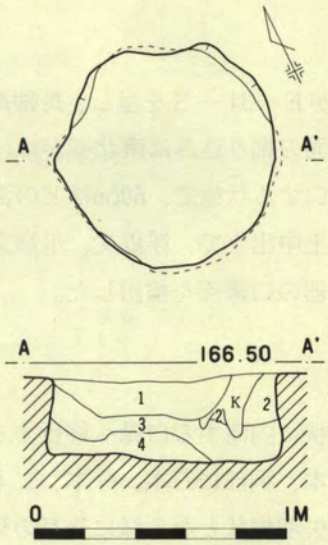
7．8は磨石である。



第78図　SD 10出土遺物

SD 11（第79図）

G区Q10Gの中央部やや北寄りに検出。プランは0.85m前後を測るほぼ円形で北壁部を除いて抉れ気味の壁面を呈し、30～35cmの深さを測る。南西部の覆土中より浮線文土器の小片が出土したのみである。



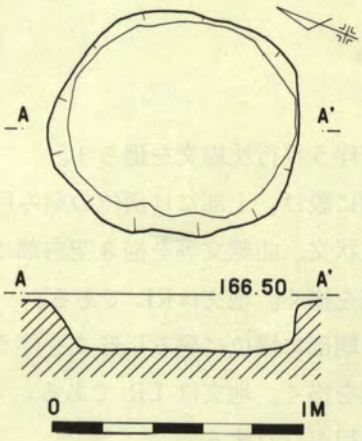
SD 11土層説明

1　暗褐色土　ローム粒、カーボン粒、白色粒子を含む。
2　暗褐色土　1層よりもやや暗い。
3　暗褐色土　1層、2層よりカーボン粒が多く、焼土粒も含む。
4　褐色土　ロームブロック粒、ローム粒を多く含む。

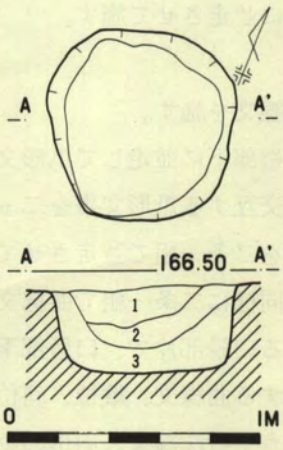
第79図　SD 11平面図

SD 12（第80図）

GQ 10Gの北東部に検出。長軸がN－21°－Wを呈し、長軸長1×短軸長0.85m前後を測る楕円形を呈する。北壁部で20cm前後の深さを測り、南壁部では15cm前後と浅い壁面が残る。出土遺物はない。



第80図　SD 12平面図



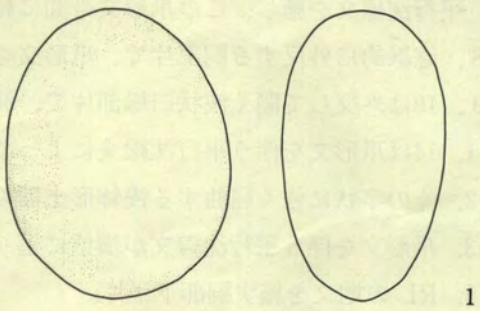
第81図　SD 13平面図

13土層説明

1　暗褐色土　全体にサラッとしている。
2　暗褐色土　ローム粒と焼土粒を少量含む。
3　暗褐色土　ローム粒、ロームブロック粒を斑点状に含み、ハード。

SD 13（第81図）

G区Q10Gの中央部やや北東方向に位置し、南西部にSD14、北西部にSD11が隣接する。75cm前後を測るやや歪んだ円形プランを呈する。壁面はほぼ垂直気味に掘り込まれ、最深部で35cmほどの深さを測る。覆土中より磨石が1点出土。

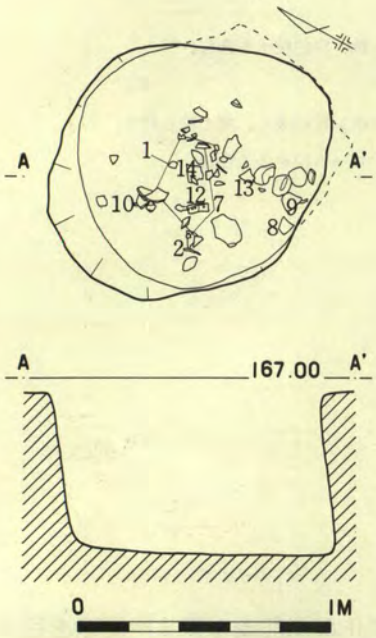


第82図　SD 13出土遺物

SD 13出土遺物（第82図）

1．平面楕円形の磨石で全面を研磨面として使用している。

SD 14（第83図）



第83図　SD 14平面図

G区Q10Gの中央部付近で検出。長軸がE－34°－Sを呈し、長軸長1.2×短軸長1mを測る楕円形である。壁面の掘り込みは南北壁がほぼ垂直で、東壁部が抉れ気味、西壁部が開口する状態で、60cmほどの深さを測る。遺物出土状態はその大半が覆土中出土で、浮線文、爪形文土器の深鉢片が多く、一点のみ浅鉢形土器の口縁部を検出した。

SD 14出土遺物（第84図）

1．直立気味に立つ胴部よりキャリパー状に内湾する口縁へ移行する波状口縁の深鉢である。波形に沿い二本、胴部に三本、一本、二本一組として並走する浮線文を廻らし、矢羽根状となる様に交互の刻み目を施す。上部浮線文帯間には、曲線文により木の葉文的区画を作り、さらに空間部を幾何学的に浮線文を貼付する。充塡された浮線文上、空間部に大き目な円形刺突文が施される。胴部浮線文帯間には RL と QL の地文が施されている。

2．直線的にやや外反する口縁部片で、口唇部下に並走して爪形文を伴う平行沈線文を三条廻らし、同様の平行沈線文を肋骨文状に曲線文を斜位に並走させて施す。

3．2に似る個体で、胴部片かも知れない。

4．直立する胴部片で、爪形文を伴う平行沈線文を施す。

5．緩やかな山形突起を付す口縁部片で、口唇部下に並走して爪形文を伴う平行沈線文を廻らす。

6．胴部より外反してラッパ状に開く個体で交互する爪形文帯を二ヵ所に設け、上部には斜位の刻み目を横位に並走する爪形文を伴う平行沈線文を二条一組で並走させて波状文、曲線文等を描き空白部に円形刺突文を施す。下部の爪形文帯間にも同様に二条一組で曲線文等を描く。地文はRL である。

7．外反気味に開き、口唇部をやや外傾させる口縁部片で、口唇部下と胴部に横位に廻る爪形文を伴う平行沈線文を施し、この爪形文帯間に相対する曲線文、縦位、斜位文を描く。地文は LR である。

8．直線的に外反する胴部片で、爪形文を伴う平行沈線文と斜位の刻み目が交互する。

9．10は外反して開く波状口縁部片で、波形に沿って爪形文帯を廻らす。

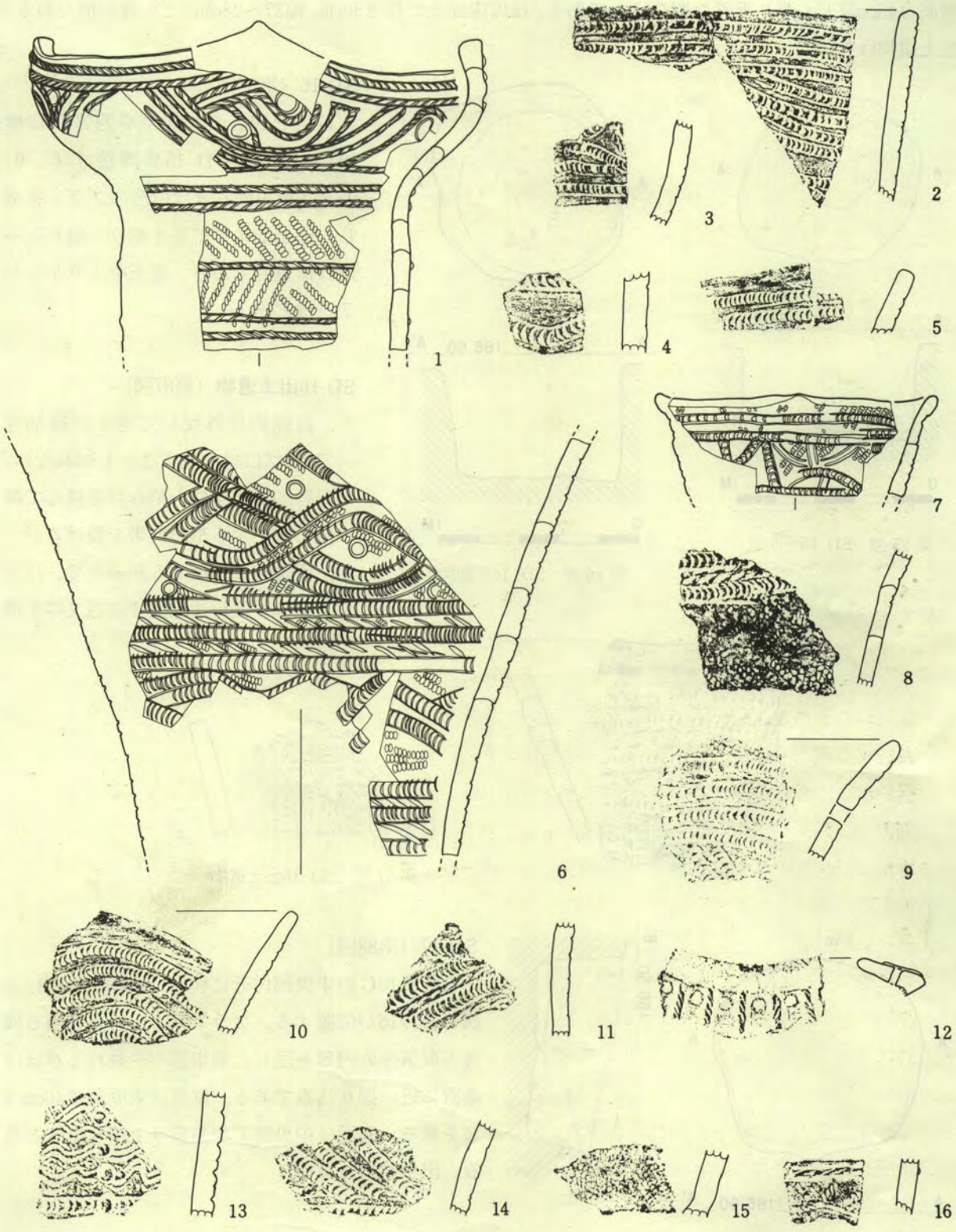
11．14は爪形文を伴う平行沈線文によって、曲線文等を施す胴部片である。

12．くの字状に強く屈曲する浅鉢形土器の、口縁部片で貫通孔と縦位の浮線文を交互する。

13．爪形文を伴う平行沈線文が横位に廻り、上部に波状文が並走し、縦位に円形刺突文を施す。

15．RL の地文を施す胴部下半片。

16．浮線文を伴う胴部片。

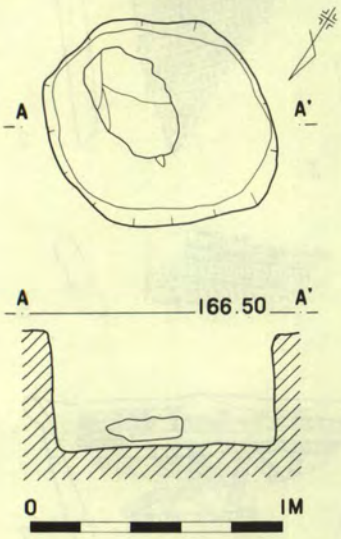


第84図　SD 14出土遺物

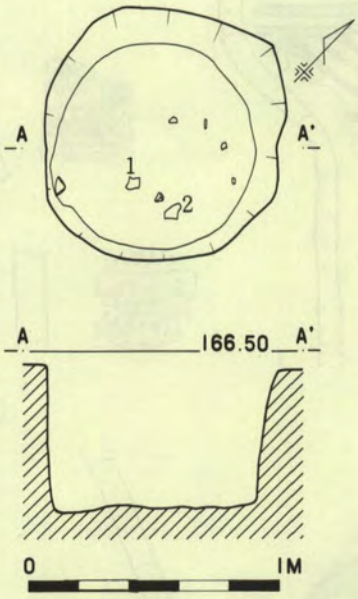
SD 15（第85図）

G区Q10Gの南辺中央部やや西寄りに検出。長軸がN－84°－Eを呈し、長軸長0.85mの楕円形である。

壁高は45cmほどを測り垂直な掘り込みである。ほぼ床面上に長さ50cm、幅27～28cmほどの礫が横たわる。出土遺物はない。



第85図　SD 15平面図



第86図　SD 16平面図

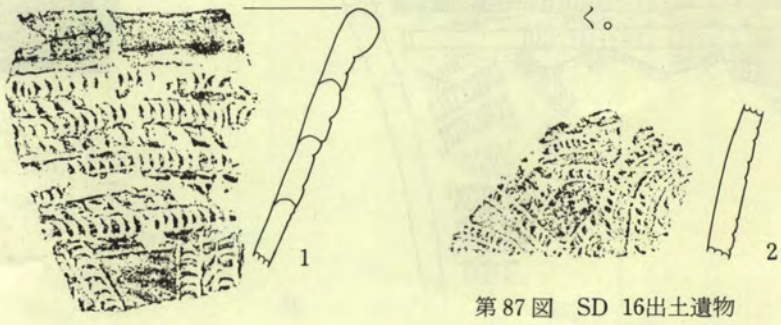
SD 16（第86図）

G区P10Gの北辺やや西寄りに検出。北方にSD 15が隣接する。0.95～1mを測るほぼ円形のプランを呈し、55cm前後の壁高を測り、掘り込みはほぼ垂直である。覆土中より小片が7点ほど出土。

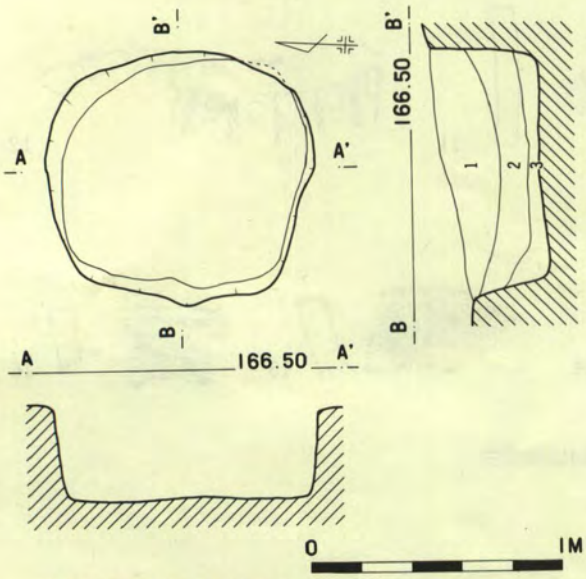
SD 16出土遺物（第87図）

1．直線的に外反して開く口縁部片で、波状口縁を呈するかも知れない。口唇部下に斜位の刻み目を挟んで横位に並走する爪形文帯を設ける。

2．直線的に外反する胴部片で、爪形文を伴う平行沈線文で曲線文等を描く。



第87図　SD 16出土遺物



第88図　SD 17平面図

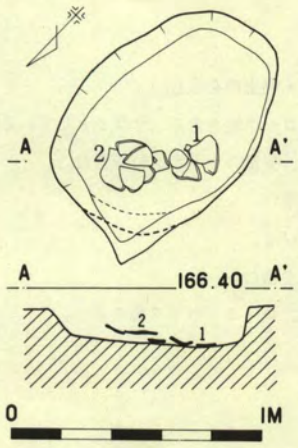
SD 17（第88図）

G区P10Gの中央部付近に検出。南東にSD19、北西にSD16が位置する。プランは1m前後を測る隅丸方形気味の円形を呈し、南東部やや抉（えぐ）れるがほぼ垂直に近い掘り込みである。壁高は東壁部で40cmほどを測る。底面は中央部でやや盛り上がり気味となる。出土遺物はない。

SD 17土層説明

1	暗褐色土	焼土粒、ローム粒を多く含む。
2	暗褐色土	1層より暗く、ロームブロック粒を含む。
3	にぶい黄褐色土	ハードにしまり、ロームブロック粒を多く含む。

SD 18（第89図）



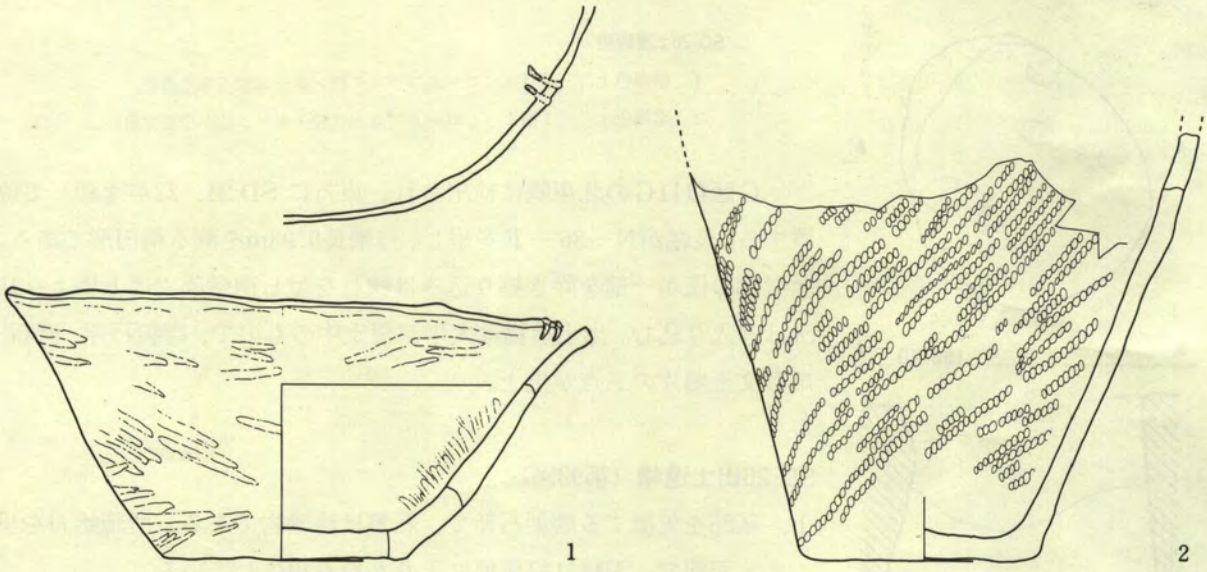
第 89 図　SD 18平面図

G区P10Gの西辺南方部に検出。長軸が磁北を呈し、長軸長1×短軸長0.7mを測る楕円形プランである。壁面は東方が垂直気味で、15cmほどの深さを測り、他壁は緩やかな掘り込みとなる。出土遺物は北方に集中し、浅鉢形土器と底部～胴部下半の個体片が接して出土。

SD 18出土遺物（第90図）

1．底部より内湾気味に立ち上がり、口縁部を緩やかに外反させて開く浅鉢形土器である。口唇部には二本一組で縦位に貼付される浮線文が一ヶ所残る。口縁部下半は主として横位、その空間部は斜位の研磨を施す。

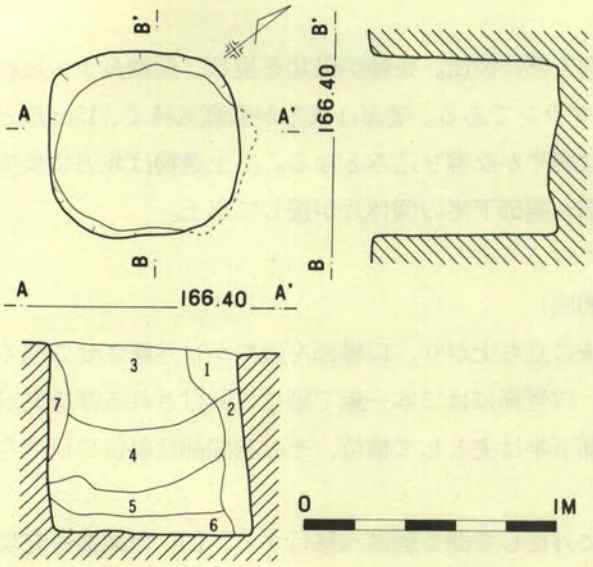
2．底部より直線的に外反して開く胴部へ移行する。LR の地文を充塡する。



第 90 図　SD 18出土遺物

SD 19（第91図）

G区Q10Gの中央部東方に検出。隅丸方形気味のプランで長軸がN－50°－Eを呈し、長軸長0.75×短軸長0.72mとほぼ同一規模を測る。底面の南東部でやや高まりがある。掘り込みは北東部が抉れ気味で他壁は垂直気味とする。壁高の残存は75cm前後を測る。出土遺物はない。

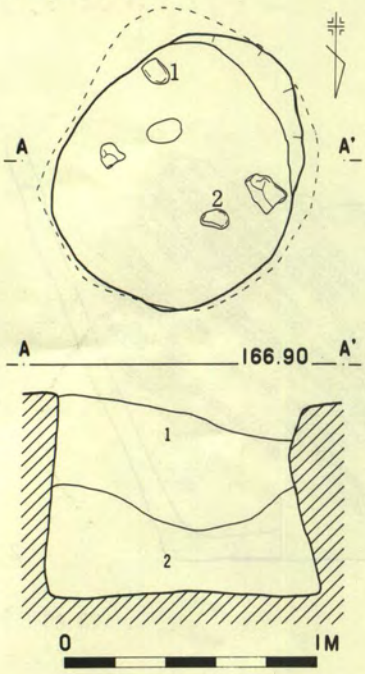


SD 19土層説明

1	暗褐色土	ローム粒・焼土粒を含む。
2	暗褐色土	ロームブロック粒を含み、サラッとしている。
3	黒褐色土	ローム粒、少量のカーボン粒を含む。
4	黒褐色土	3層より暗い。
5	黒褐色土	粘質を帯びる。
6	暗褐色土	ローム粒を含む。
7	暗褐色土	ローム粒、ロームブロック粒を含む。

第91図　SD 19平面図

SD 20（第92図）



第92図　SD 20平面図

SD 20土層説明

1	暗褐色土	斑点状にロームブロック粒・ローム粒を多く含む。
2	暗褐色土	1層よりもロームブロック粒・ローム粒が少量で暗い。

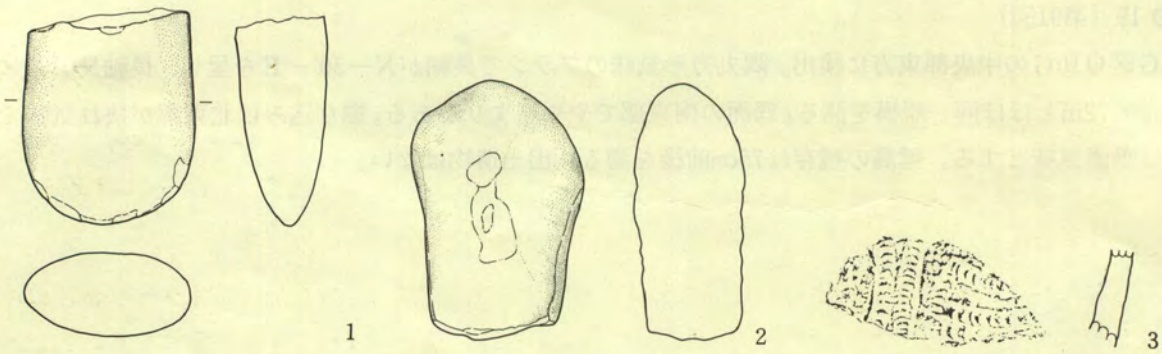
G区O11Gの北東隅に検出され、東方にSD 21、22が連続して位置する。長軸がN－36°－Eを呈し、長軸長0.93mを測る楕円形である。北壁部の僅か一部を除き掘り込みは抉れを呈し南壁部では上場より15cmほど入り込む。出土遺物は大半が覆土中のもので、磨製石斧、磨石、爪形文土器片の三点が出土。

SD 20出土遺物（第93図）

1．基部を欠損する磨製石斧で、石質は輝緑岩である。所謂蛤刃を呈する刃部で、刃縁は打撃痕によりかなり損失している。

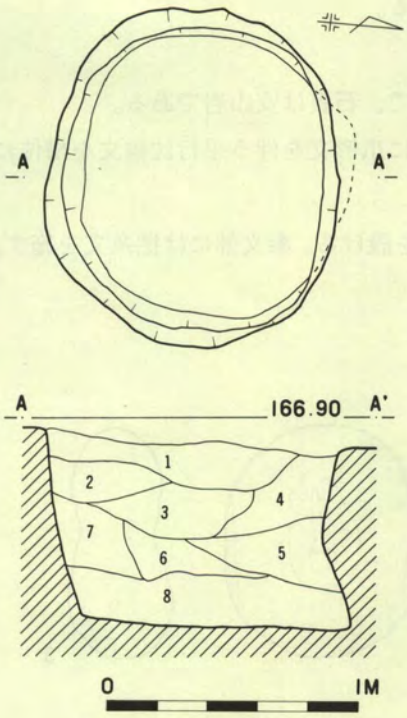
2．安山岩の磨石で、表裏面に点状痕で凹孔を施す。

3．爪形文を伴う平行沈線により文様を施す胴部片である。



第93図　SD 20出土遺物

SD 21（第94図）



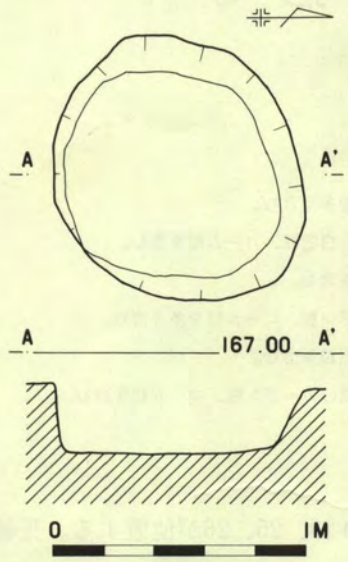
第 94 図　SD 21平面図

SD 21土層説明

1	暗褐色土	斑点状にロームブロック粒、ローム粒を多量に含む。
2	にぶい黄褐色土	少量のカーボン粒を含む。
3	にぶい黄褐色土	2層よりも密で、焼土粒を含む。
4	黒褐色土	少量のロームブロック粒、ローム粒を含む。
5	ロームブロック	
6	にぶい黄褐色土	3層に似るが、明るい。
7	ロームブロック	5層に似る。
8	暗褐色土	少量のロームブロック粒、ローム粒を含む。

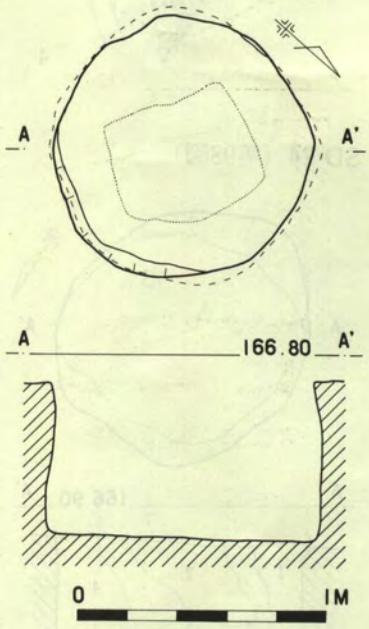
G区P12Gの南西部に検出。僅かにその一部がO12Gに係る。長軸がN－86°－Eを呈し、長軸長1.35×短軸長1.15mを測る楕円形である。北壁部の一部が上場より最大13cmほど抉れるが他壁は平坦な底面より垂直気味、上部につれて開口気味に掘り込まれている。出土遺物はない。

SD 22（第95図）



第 95 図　SD 22平面図

G区P12Gの南辺に係り検出。西方に隣接してSD 21が位置する。長軸長1.13×短軸長0.95mを測る楕円形である。平坦な底面より南西部壁を除いて開口する掘り込みで、20～30mほどの壁高が残る。出土遺物はない。



第 96 図　SD 23平面図

SD 23（第96図）

G区Q12Gの南東部隅に検出。1～1.05mを測る円形プランを呈する。掘り込みは上場より底面に連れて抉れ気味で60cmほどの壁高を測る。底面に56×47cmの範囲に焼土が1～3cmほど堆積する。出土遺物は覆土中より磨石、土器片が出土。

SD 23　出土遺物（第97図）

1．底部より直立気味に外反する胴部へ移行する。地文はＲＬである。

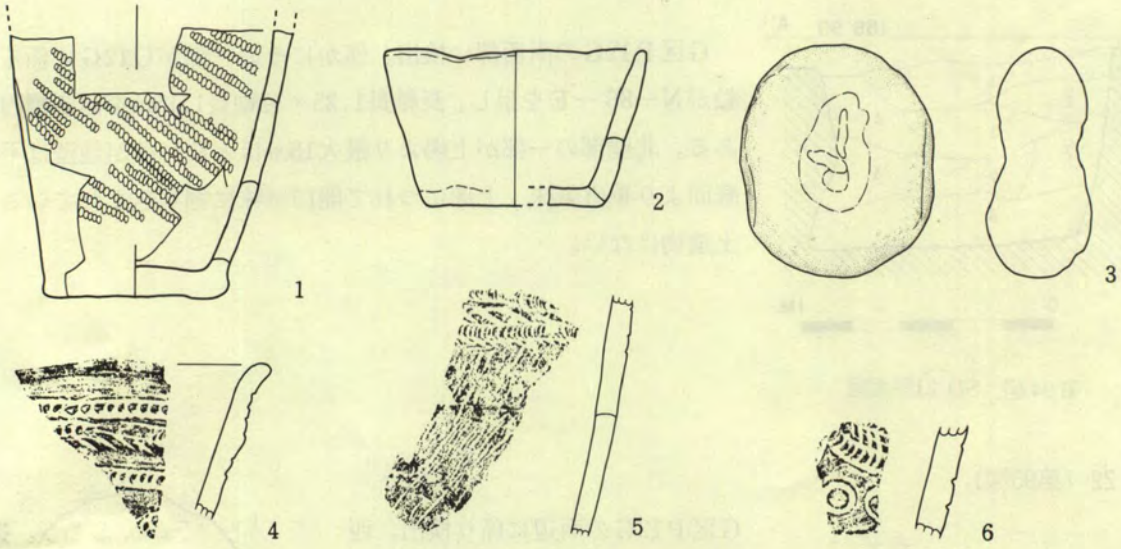
2．猪口状の小型土器である。

3．円形気味の平面形を呈し、表裏面に逆円錐痕の凹孔を施す磨石で、石質は安山岩である。

4．外反して開く口縁部片で斜位の刻み目を施す隆帯を設け、上下に爪形文を伴う平行沈線文を横位に廻らす。

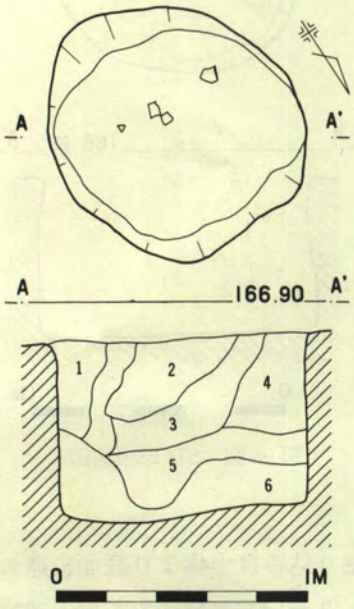
5．内湾気味に外反する胴部片で、斜位の刻み目を挟んで爪形文帯を設ける。素文部には撚糸文を施す。

6．爪形文帯と円形刺突文を施す胴部片。



第97図　SD 23出土遺物

SD 24（第98図）



第98図　SD 24平面図

SD 24土層説明

1	にぶい黄褐色土	白色粒子、ローム粒を多く含む。
2	褐色土	カーボン粒、焼土粒、白色粒、ローム粒を含む。
3	暗褐色土	カーボン粒、焼土粒を含む。
4	にぶい黄褐色土	1層に似るが、カーボン粒、ローム粒を多く含む。
5	にぶい暗褐色土	多少粘質も帯び、焼土粒を含む。
6	暗褐色土	ハードにしまり、少量のカーボン粒、ローム粒を含む。

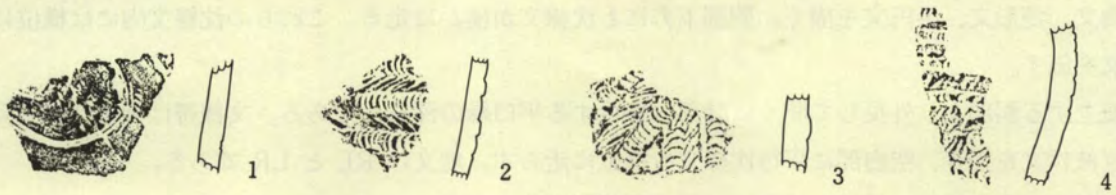
G区P13ポイントに検出。北方にSD 23、25、26が位置する。長軸がN－14°－Wを呈し、長軸長1.05×短軸長0.95mを測る。北東部が隅丸を呈する楕円形で、掘り込みは垂直に近い。最深部で75cmの深さを測る。覆土中より小片が少量出土。

SD 24出土遺物（第99図）

出土した遺物の総てが胴部の小破片である。

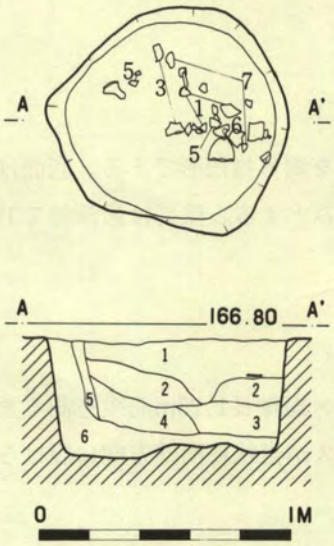
1．直立気味に立つ胴部片で、平行沈線文により曲線文を描く。

2～4は爪形文帯を伴う胴部片で、4には円形刺突文が施されている。



第99図　SD 24出土遺物

SD 25（第100図）

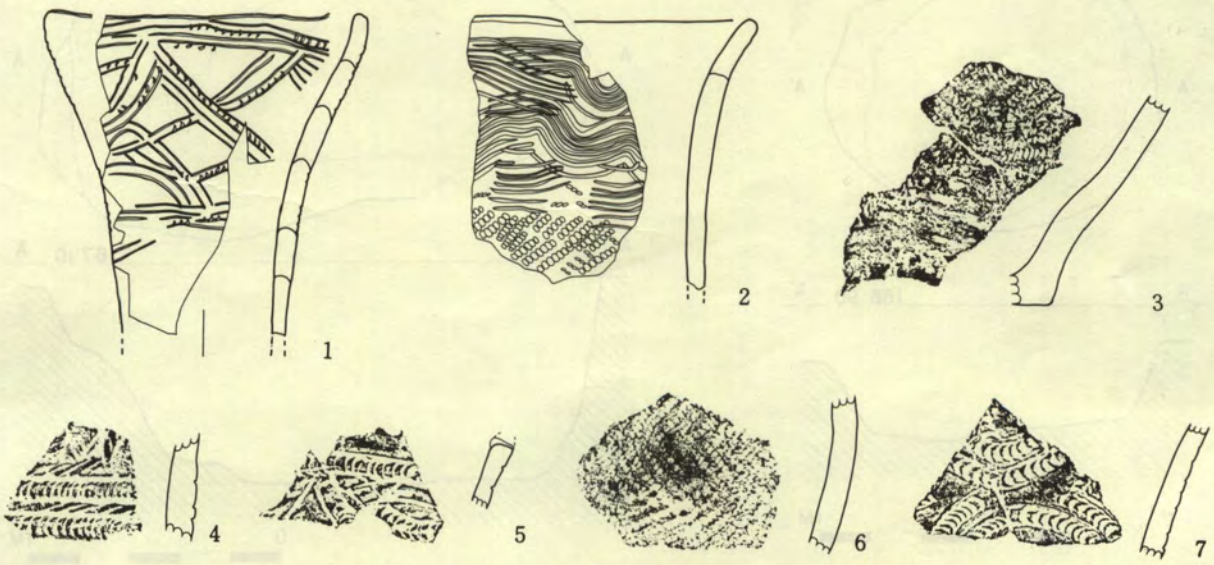


第100図　SD 25平面図

SD 25土層説明

1	褐色土	断層
2	暗褐色土	ハードにしまり、カーボン粒を含む。
3	暗褐色土	2層よりも暗い。
4	褐色土	
5	暗褐色土	3層に似るが、やや粘質。
6	黄褐色土	斑点状に暗褐色土を混える。

G区Q13Gの南西部、SD 24に隣接して検出。地割れが南東部に係り、形状の一部を崩しているが、80～85cmほどの円形プランであろう。掘込みはほぼ垂直気味で、45cm前後の壁高が残存する。出土遺物は総てが覆土中の出土である。



第101図　SD 25出土遺物

SD 25出土遺物（第101図）

1．底部を欠損する小型深鉢である。胴部下半より上方に連れてやや外反し、上半より外反して開き直立気味に内湾する口縁部へ移行する。口唇部には小突起を付していたかもしれない。口唇部下と胴部に二条一組の平行沈線文を横位に並走させて廻らし、この空間部に沈線文を斜位、曲線的に走らせ、三角文、菱形文、半円文を描く。胴部下方にも沈線文が僅かに走る。これらの沈線文内には横位に爪形文を施す。

2．直立する胴部より外反して開く口縁部へ移行する平口縁の深鉢片である。文様帯は櫛歯状施文具により波状文を描き、空白部に平行沈線文を横位に走らす。地文は RL と LR である。

3．底部より多少屈曲を呈し、外反して開く胴部下半片である。

4．5、7は爪形文を伴う平行沈線文により文様を描く破片で、4は斜位の刻み目を挟む爪形文帯が施される胴部片。5は口唇部に小突起を付す。7は相対する曲線文が施されている。

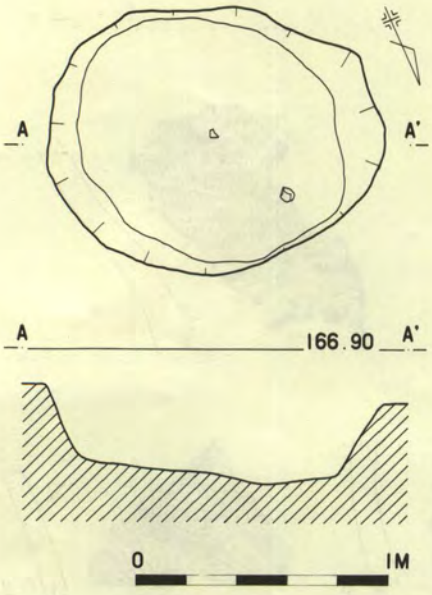
6．内湾する胴部片で RL と LR を羽状縄文的に交互して施す。

SD 26（第102図）

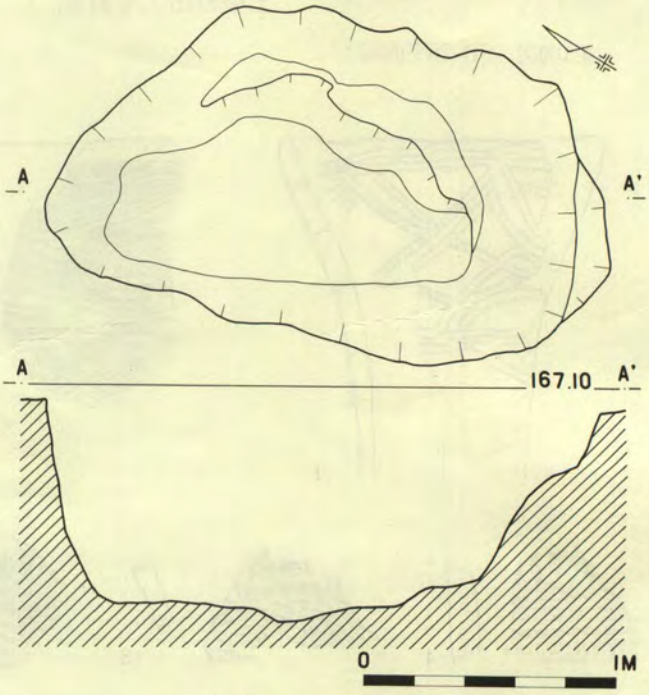
G区Q13Gに検出。長軸E－25°－Sを呈し、長軸長1.33×短軸長1.05mを測る楕円形である。底面は南方部より北方部に緩やかな傾斜を呈し、北壁部を除いて開口する掘り込みとする。壁高は最深部で33cmほどを測る。出土遺物は覆土中より少片が一点出土したのみである。

SD 27（第103図）

G区P14Gの西辺を跨いで検出。長軸がN－25°－Wを呈し、長軸長2.25×短軸長1.25m前後を測る歪んだ楕円形である。底面は多少起伏があり、東壁部には歪んだ半月状テラスが帯状に南壁方向に設けられる。最深部で85cmほどを測る。出土遺物はない。



第102図　SD 26平面図



第103図　SD 27平面図

⑵　包含層遺物分類（第104～113図）

B群3類B種（第104、105図）

1．直立気味に立ち上がる胴部より大きく外反して口縁部へ移行する平口縁の深鉢である。口唇部には斜位の刻み目を施す浮線文を二本一組で縦位に貼付する。口唇部下と胴部に矢羽根状に交互する斜位の刻み目を挟んで四条一組の爪形文帯を廻らし、さらに素文部との区画に一条の爪形文帯を横位に廻らす。爪形文帯間の上部文様は三条一組とする爪形文帯により菱形文区画を描き、空白部に相対する曲線文を施す。下部文様は曲線文、縦位文等で構成する。素文部は RL と LR の地文を施す。

2．直線的にやや外反する口縁部片で、口唇下に斜位の刻み目を挟んで三条一組の爪形文帯を廻らし、下方に斜位、曲線文等で文様を描く。

3．直立気味に外反する胴部より大きく内湾気味に開く口縁部へ移行する。山形の突起を付す。口唇部下に矢羽根状に交互する刻み目を挟んで三条一組の爪形文帯を廻らす。下方は斜位、曲線文で文様を構成する。

4．波頂部が丸味を呈する波状口縁部と胴部片である。波底の口唇部には小突起を付す。波形に沿い口唇部下に斜位の刻み目を挟んで三条一組、胴部に四条一組の爪形文帯が設けられ、空間部に波状文、曲線文等でレンズ状等の文様を描く。空白部に円形刺突文を施す。

5．直立する胴部より外反して開く胴部上半へ移行する。爪形文を伴う平行沈線文を四条一組で横位に廻らせ区画帯とする。この爪形文帯に刻み目を横位に連続させる。素文部はRL の地文を斜位と横位に施す。文様部は曲線文、円形刺突文で構成する。

6～11は胴部片で斜位に施された刻み目を挟んで爪形文帯を横位に廻らし、渦巻文様等を施す。6～8には円形刺突文を伴う。

12～17．波状口縁または小突起を付す口縁部片で、12は波状に沿い、刻み目を挟んで爪形文帯を廻らし、この口縁部形に沿う爪形文帯下の刻み目部を隆帯状とする。下方にも爪形文帯を曲線的に配す。

13．山形小突起を付す口縁部片で、横位に並走する刻み目を挟む爪形文帯等を施す。

14．波頂部が山形に鋭る波状口縁で、16と同一個体かも知れない。平行沈線文により波頂下には木の葉文状区画等を描き、沈線文間を連続爪形文で埋める。地文は無節のLであろう。

15．波状口縁を呈する波頂部の口縁部片で、刻み目を挟んで爪形文帯を曲線的に施す。

17．口縁部形に沿い刻み目を施す隆帯状高まりを設け、下方に連続爪形文を伴う平行沈線文で意匠文を描く。

18．21は口唇部下に、刻み目を挟んで爪形文帯を横位に並走させる。

19．浅い平行沈線文より、木の葉状、レンズ状文様を描き、沈線文間を連続爪形文で埋める。

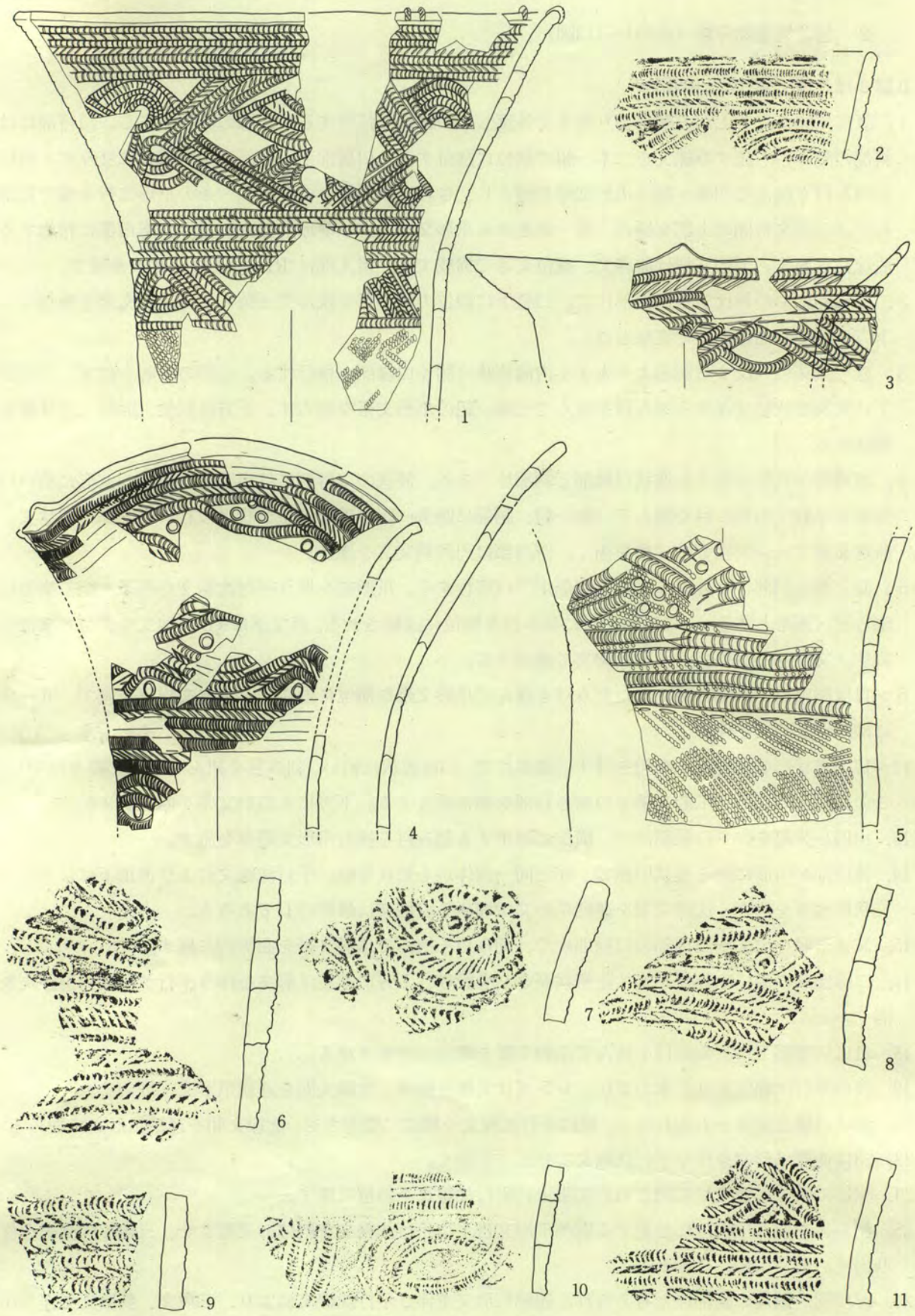
20．波状口縁を呈すかも知れない。雑に平行沈線文を横位に並走させ、沈線文間を連続爪形文で埋める。

22．23は連続爪形文を伴う平行沈線文で意匠文を描く。

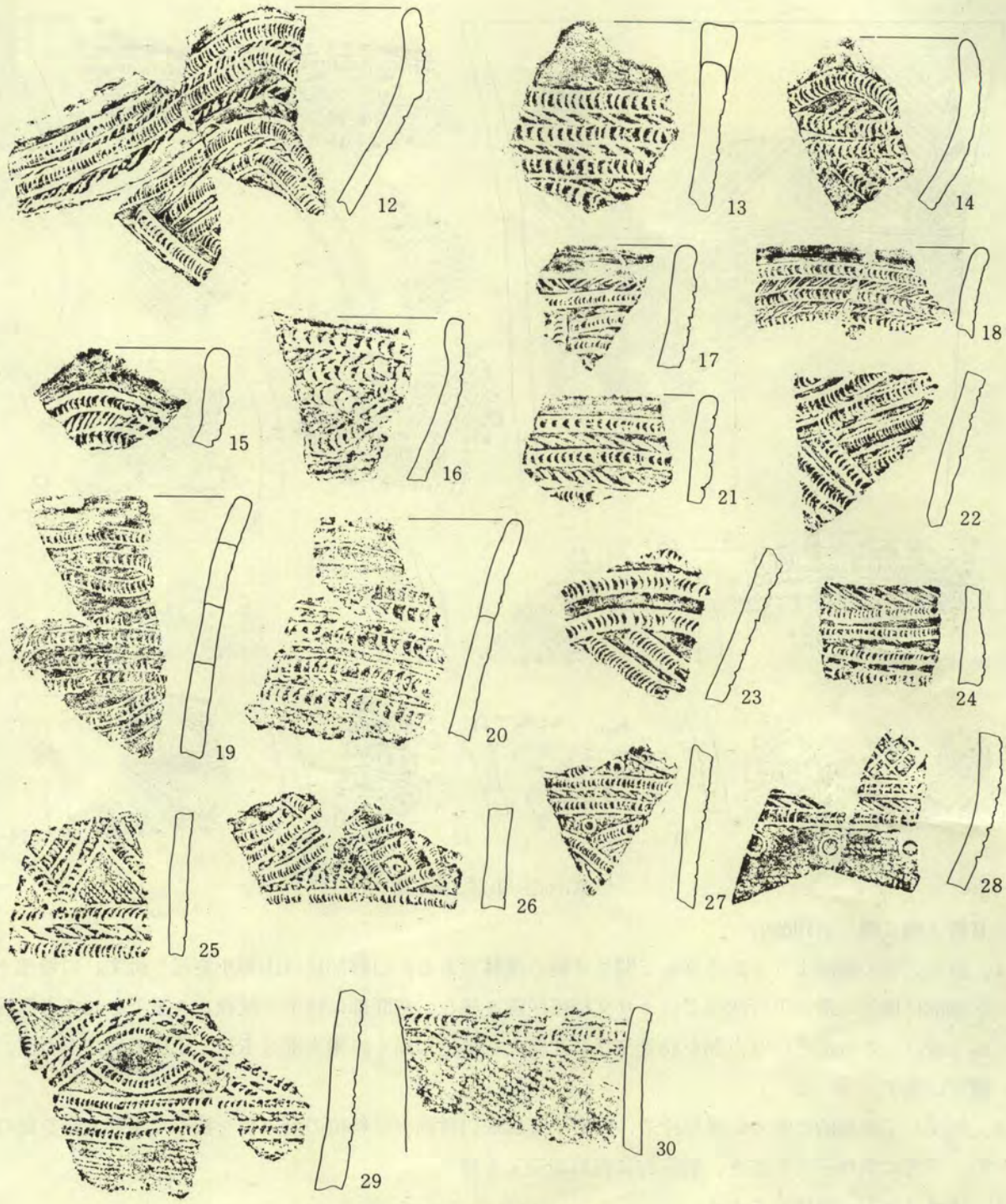
24．胴部に横位に並走して廻る爪形文帯上に平行沈線文を斜位に施す。

25．刻み目を挟んで横位に並走する胴部爪形文帯上に平行沈線文を斜位に交差させ、三角形区画等を作り出す。地文はRL である。

26．27は同一個体の胴部片と考えられ、連続爪形文を伴う平行沈線文により、三角文、菱形文を作り出し、空白部に円形刺突文を施す。



第104図　B群３類B種(1)

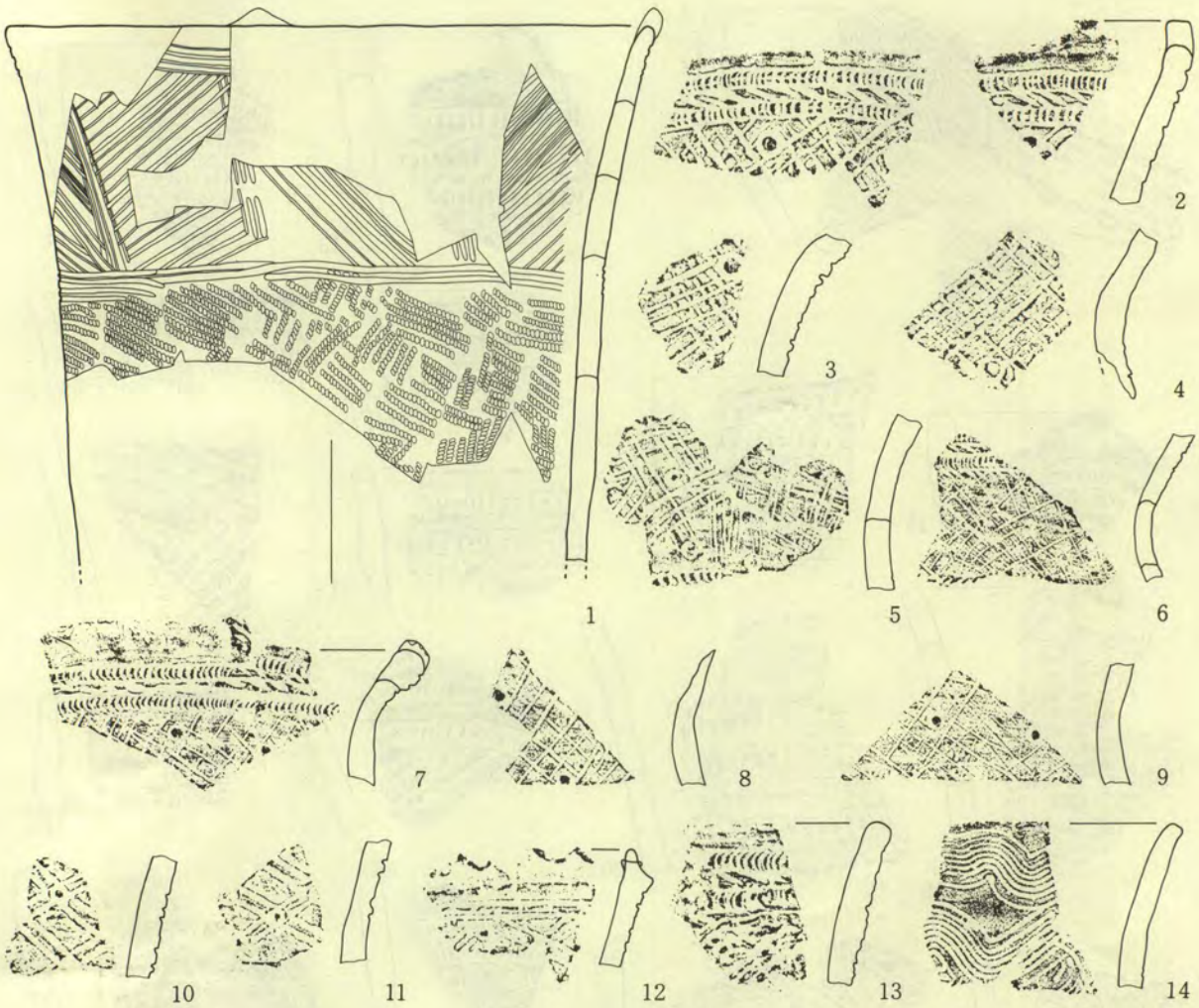


第105図　B群3類B種(2)

28. 刻み目を挟んで横位に爪形文帯を廻らし、上部に斜格子文、下部に円形刺突文を施す。

29. 丸味を帯びる棒状施文具による刻み目を挟んで横位に爪形文帯を廻らし、上部に同様の刻み目を挟んで並走する二条一組の爪形文帯を山形に施し、空間部をさらに区分してレンズ状、三角文状の区画を作り出している。下部は素文部で RL の地文を充塡する。

30. 直立して文様部で外反気味とする胴部片で、連続爪形文を伴う平行沈線文を挟んで上下に刻み目を連続させる。



第106図　B群３類Ｃ種

B群３類Ｃ種（第106図）

1．直立気味の胴部よりやや外反して開く寸胴の深鉢である。口唇部には山形小突起を付す。口唇部下と胴部に横位に廻る平行沈線文により文様帯区画を施し、空間部に縦位に沈線文を垂下させて方形区画を設け、さらにその空白部を肋骨文状に沈線文を斜位に描く。素文部は RL と LR の地文を斜位、横位に施す。

2．外反して直線的に開く口縁部片で、山形小突起を口唇部下に斜位の刻み目を挟んで爪形文帯を廻らし、下方に斜格子文を描き、散在的に円形刺突文を施す。

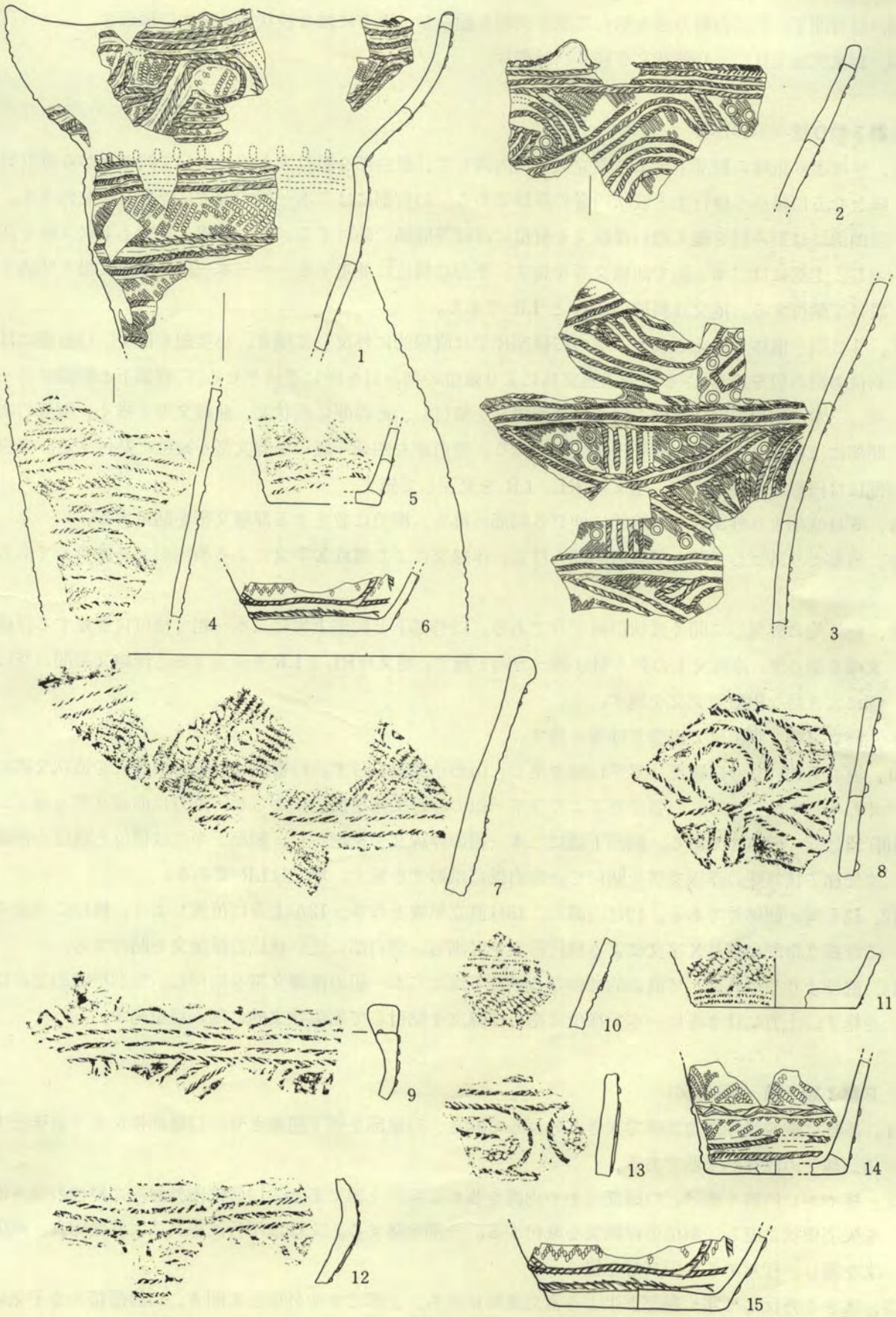
3．４は２と同一個体であろう。

5．下部に僅かな爪形文帯が残り、上方に斜格子文と円形刺突文が施される胴部片である。

6．上部に斜位の刻み目を挟んで爪形文帯を設け、下方に斜格子文を描く。

7～9は同一個体と考えられる口縁部～胴部片である。７の口縁部片の口唇部には刻み目を施す浮線文を縦位に貼付する。口唇部下には目刻みを挟む爪形文帯を横位に廻らし、下方に斜格子文を描き、散在的に円形刺突文を施す。

10～11も同一個体と考えられる口縁部～胴部上半片である。口縁部は平口縁を呈し、口唇部に棒状施文具で鋸歯状となる刻み目を連続させる。平行沈線文により斜格子文を描き、交点に円形刺突文を施す。



第107図　B群３類D種

13. 口唇部下に斜位の刻み目を挾んで爪形文帯を廻らし、下方に雑な波状文を施す口縁部片。
14. 鋸歯状施文具により波状文を描く口縁部片。

B群3類D種（第107図）

1．すぼまり気味の胴部下半より直立気味に内湾して、屈曲部を設け大きく外反して開きながら直立気味となる口縁部へ移行する波状口縁の深鉢である。口唇部には二本一組で縦位に浮線文を貼付する。屈曲部には刻み目を施す短い浮線文を縦位にほぼ等間隔で貼付する。この浮線文帯で上下に文様を区画し、上部には二本一組で曲線文等を施す。下方は横位に並走する一～三本一組の浮線文帯を間隔を設けて貼付する。地文は斜位の RL と LR である。
2．3は同一個体と考えられる。2の口縁部片では直線的に外反して開き、小突起を付す。口唇部には斜位の刻み目を施し、さらに棒状施文具により縦位の刻み目を密に連続させる。口唇部下と胴部に二ヶ所、三本一組の矢羽根状刻み目を伴う浮線文を貼付し、その間に波状文、曲線文等を描く。胴部の空間部には相対する曲線文で半円文区画を作り、空白部を四条一組の浮線文帯を縦位に貼付する。空白部には円形刺突文を施す。地文は RL、LR を交互して施す。
4．5は底部より外反して直線的に伸びる胴部へ移る。横位に並走する浮線文帯を貼付する。
6．底部より外反して開き気味の胴部へ移る。浮線文により離れX字文による楕円形文を施すのであろう。
7．直線的に外反して開く波状口縁部片である。口唇部下と胴部上半に二本一組で横位に並走する浮線文帯を廻らす。浮線文上の刻み目は同一方向で施す。地文はRL とLR を交互する。浮線文帯間の空白部に大き目な円形刺突文を施す。
8．直立気味な胴部片で渦巻文様等を施す。
9．直立気味に立つ口縁部片で平口縁を呈し、山形小突起を付す。口唇部には細い浮線文を波状文的にくねらして貼付する。口唇部直下より三本一組の浮線文帯を横位に廻らし、下方に曲線文等を施す。
10．11は同一個体片である。胴部下端に二本一組の浮線文帯を廻らし、胴部下半には横位と縦位の浮線文で梯子状気味の浮線文帯を貼付し、空白部に爪形文を施す。地文はLR である。
12．13も同一個体片である。12は内湾し、13は直立気味となり、12が上方に位置しよう。横位に並走する浮線文帯間に離れX字文による楕円形文を区画し、空白部に短い横位の浮線文を貼付する。
14．底部よりやや外反して直線的に伸びる胴部下端に二本一組の浮線文帯を貼付し、矢羽根状の刻み目を施す。上方にはさらに一本で横位に廻る浮線文を貼付して鋸歯状文的に刻み目を施す。

B群3類F種（第108図）

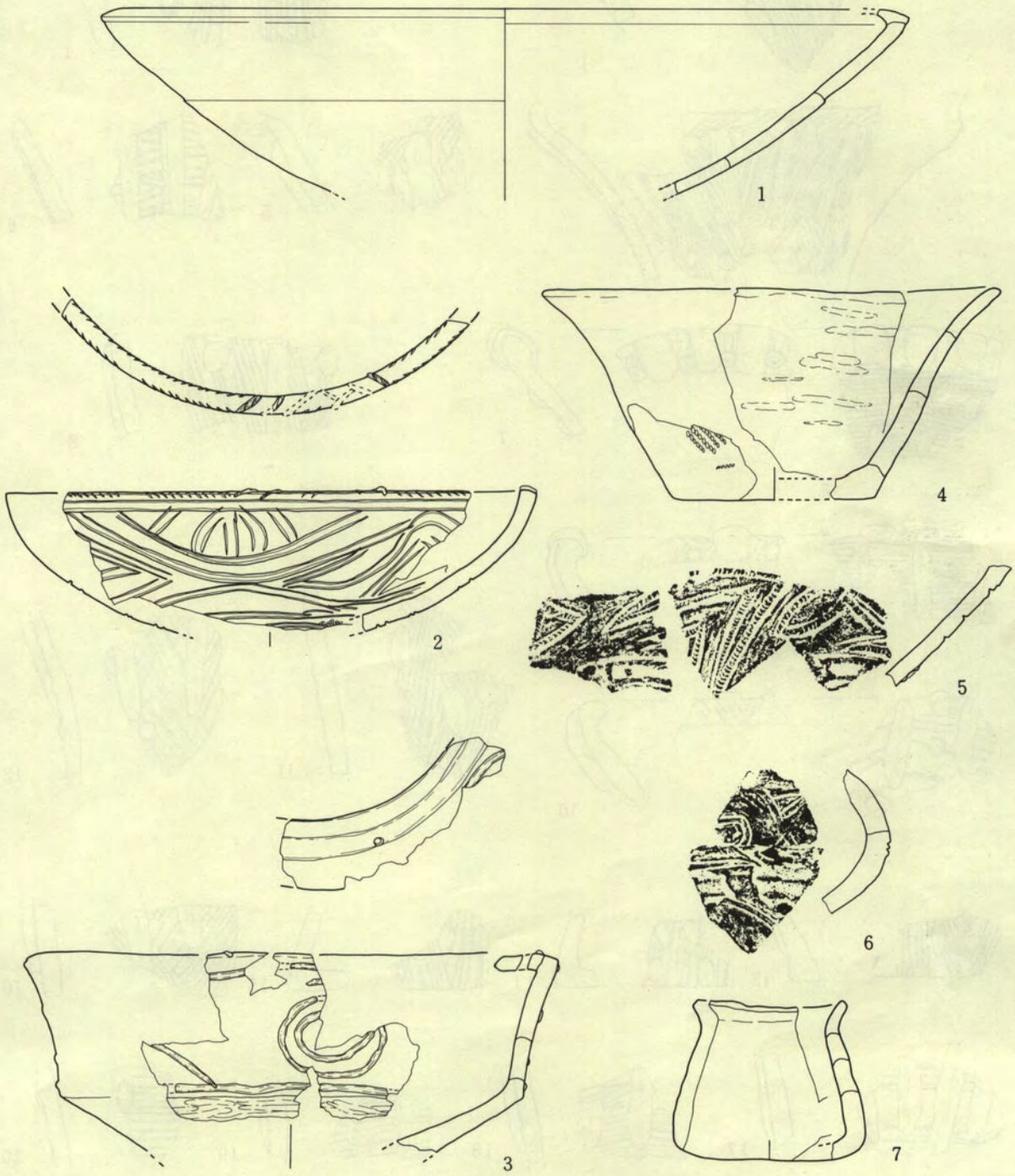
1．胴部に陵を設け内湾気味で大きく外反して開き、口縁部を強く屈曲させ、口縁部帯を水平気味とする。薄手の浅鉢形土器である。
2．緩やかに内湾を続け、口縁部でやや内湾を強める埦形土器である。口唇部内外面端に斜位の刻み目を矢羽根状に施し、斜位の浮線文を貼付する。一部剝落する。文様は平行沈線文により曲線文、縦位文を施し、相対する半円文等を描く。
3．大きく外反して開く胴部下半より直立気味に立ち、上部でやや外反して開き、口縁部帯を水平気味に屈曲させる。口縁部帯には貫通孔を設ける。体部には浮線文により渦巻文等を施す。

4．底部より内湾気味に外反して開き、外反して大きく開く口縁部へ移行する。体部は横位に施された研磨痕を残す。

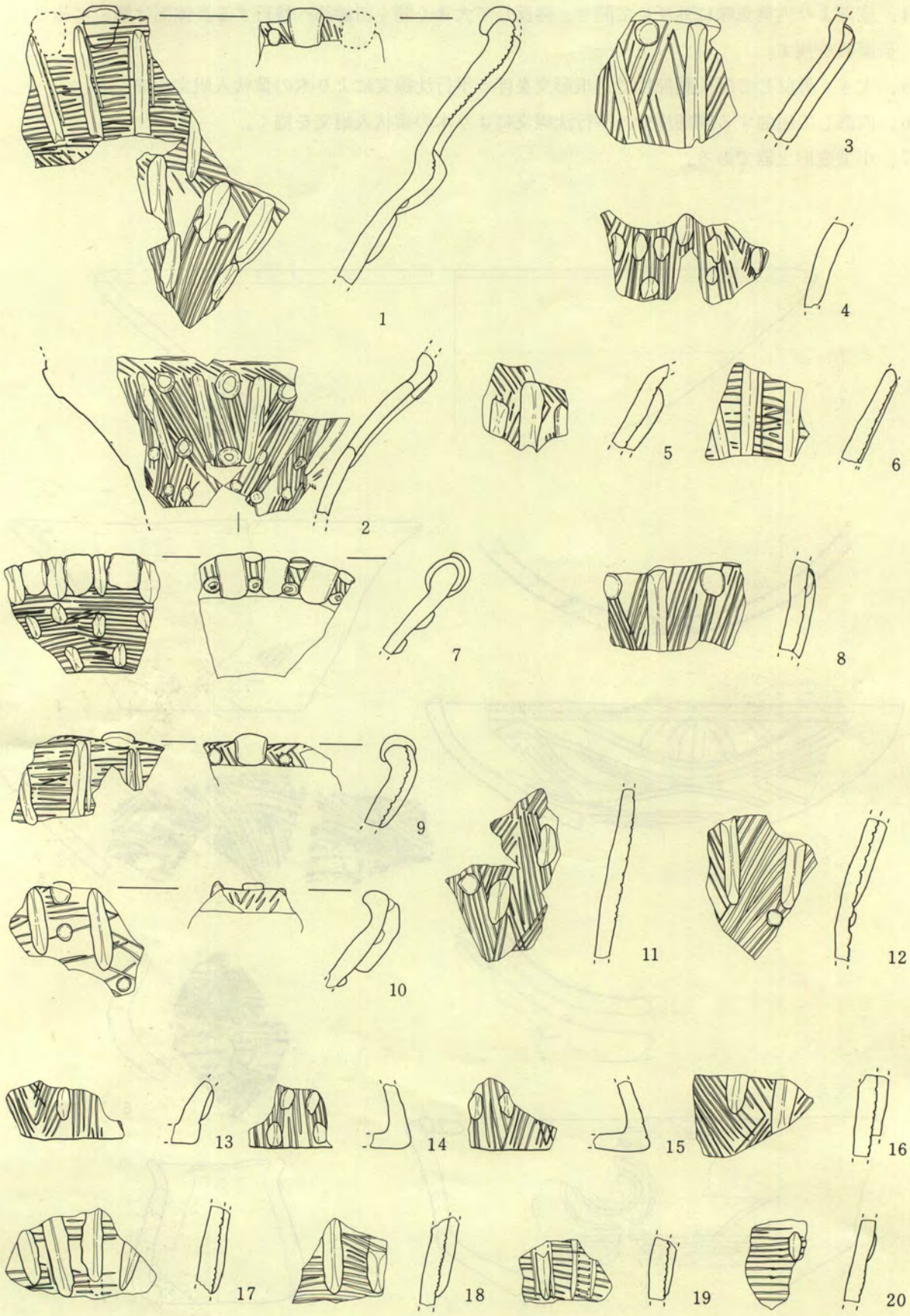
5．大きく外反して開く胴部片で、爪形文を伴う平行沈線文により木の葉状入組文を描く。

6．内湾して屈曲する胴部片で、平行沈線文により木の葉状入組文を描く。

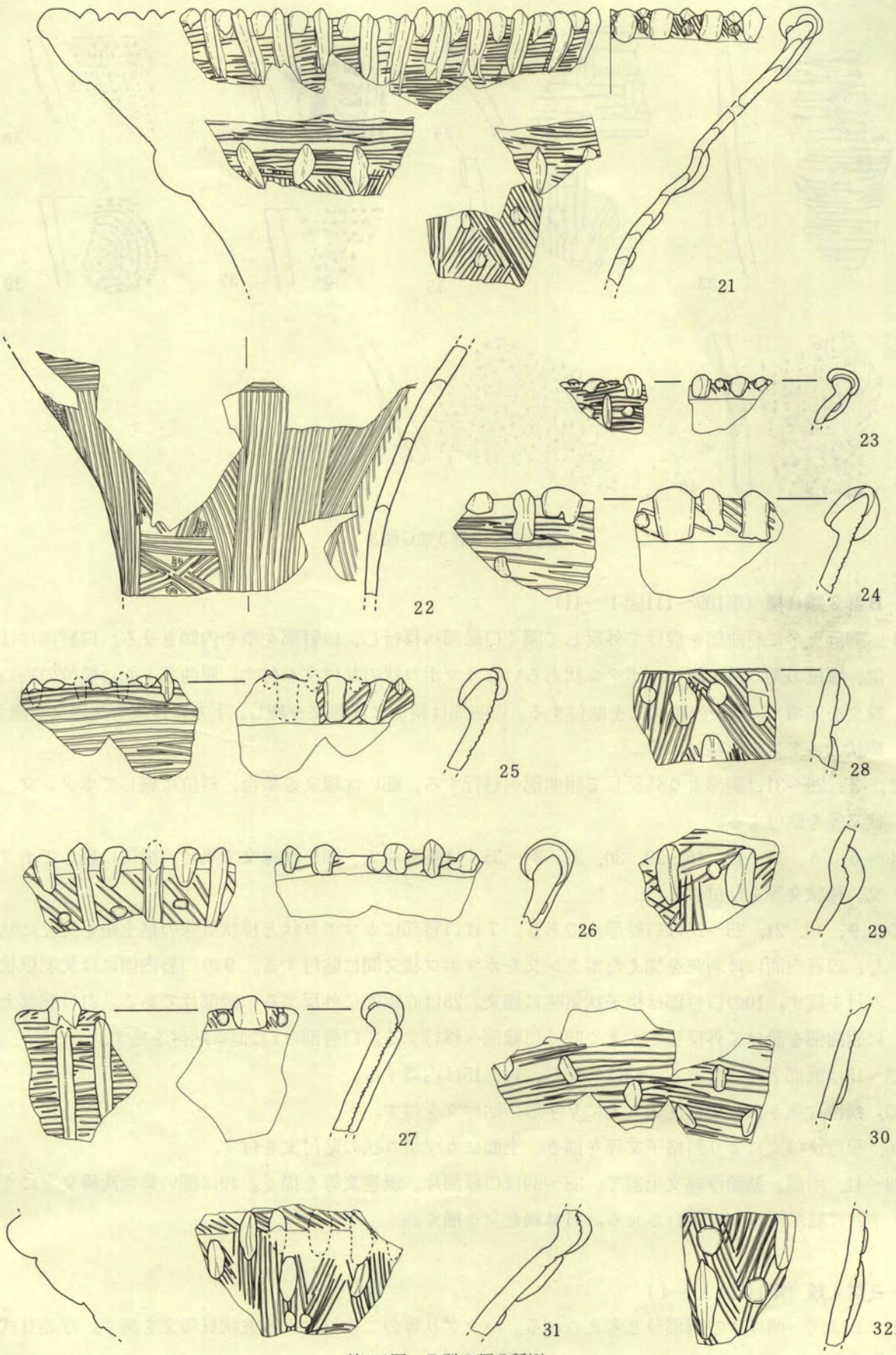
7．小型壺形土器である。



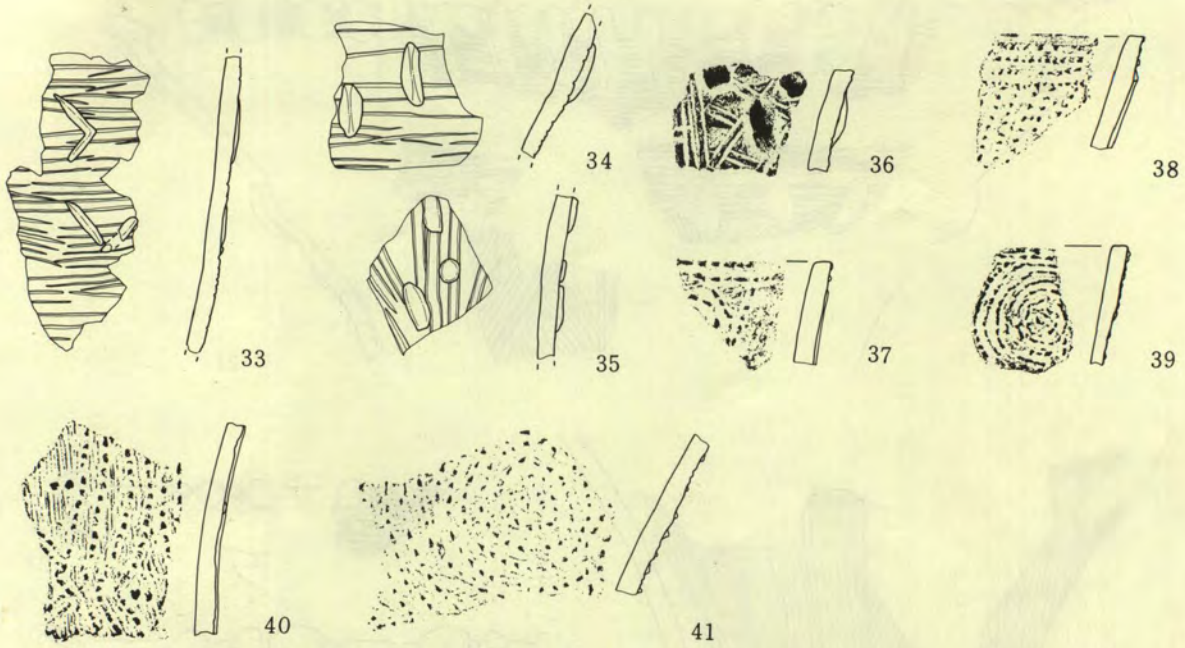
第108図　B群3類F種



第109図　B群３類Ｇ種(1)



第110図　B群3類G種(2)



第111図　B群3類G種(3)

B群3類G種（第109～111図1～41）

1．胴部上半に屈曲部を設けて外反して開く口縁部へ移行し、口唇部をやや内傾させる。口唇部には斜位、縦位の刻み目を施し、ボタン状あるいはカマボコ状の貼付文を付す。屈曲部上面は横位の細い沈線文を充塡し、縦長の棒状文を貼付する。屈曲部は斜位に沈線文を施し、下方には集合沈線文を施し、棒状、ボタン文を貼付する。

2．3．29～31は胴部より外反して屈曲部へ移行する。細い沈線文を集合、斜位に施してボタン文、棒状文等を貼付する。

4～6．8．11．12．16～20．30．32．34．35．は胴部片で、細い沈線文で集合、横位に施してボタン文、棒状文等を貼付する。

7．9．10．21．23～28は口縁部片である。7は口唇部にカマボコ状と棒状気味の粘土紐を交互に貼付し、口唇内面には刺突を加えたボタン文をカマボコ状文間に貼付する。9の口唇内面には矢羽根状刻み目を施す。10の口唇部は格子状気味に施文。28は直線的に外反する口縁部片である。21は胴部上半に屈曲部を設けて外反して大きく開く口縁部へ移行する。口唇部は7に似る貼付を施す。

13～15は底部下端片である。13は外反し、14、15は内湾する。

33．横位に施された集合沈線文上にV字形の貼付文を付す。

36．平行沈線文により斜格子文等を描き、上面にカマボコ状の貼付文を付す。

38～41．所謂、結節浮線文土器で、38～39は口縁部片。渦巻文等を描く。40は細い集合沈線文上にくの字状に結節浮線文を集合させる。41は渦巻文を描く。

B群4類（第112図1～4）

1．2は同一個体片の胴部分と考えられる。ハマグリ等の二枚貝による波状貝殻文を施す。浮島II式に比定される。

3．口唇部に縦位の刻みを不規則に連続させ、波状口縁気味に口唇部の一部が傾斜する。胴部の波状貝殻文は貝殻でなく、かなり細い施文具で充塡している。浮島III式に比定される。

4．小型の二枚貝による波状貝殻文を充塡し、その上に平行沈線文を施している。浮島系の所産である。

5．アナダラ属の貝殻の復縁による刺突、平行沈線文を施す。興津II式に比定される。

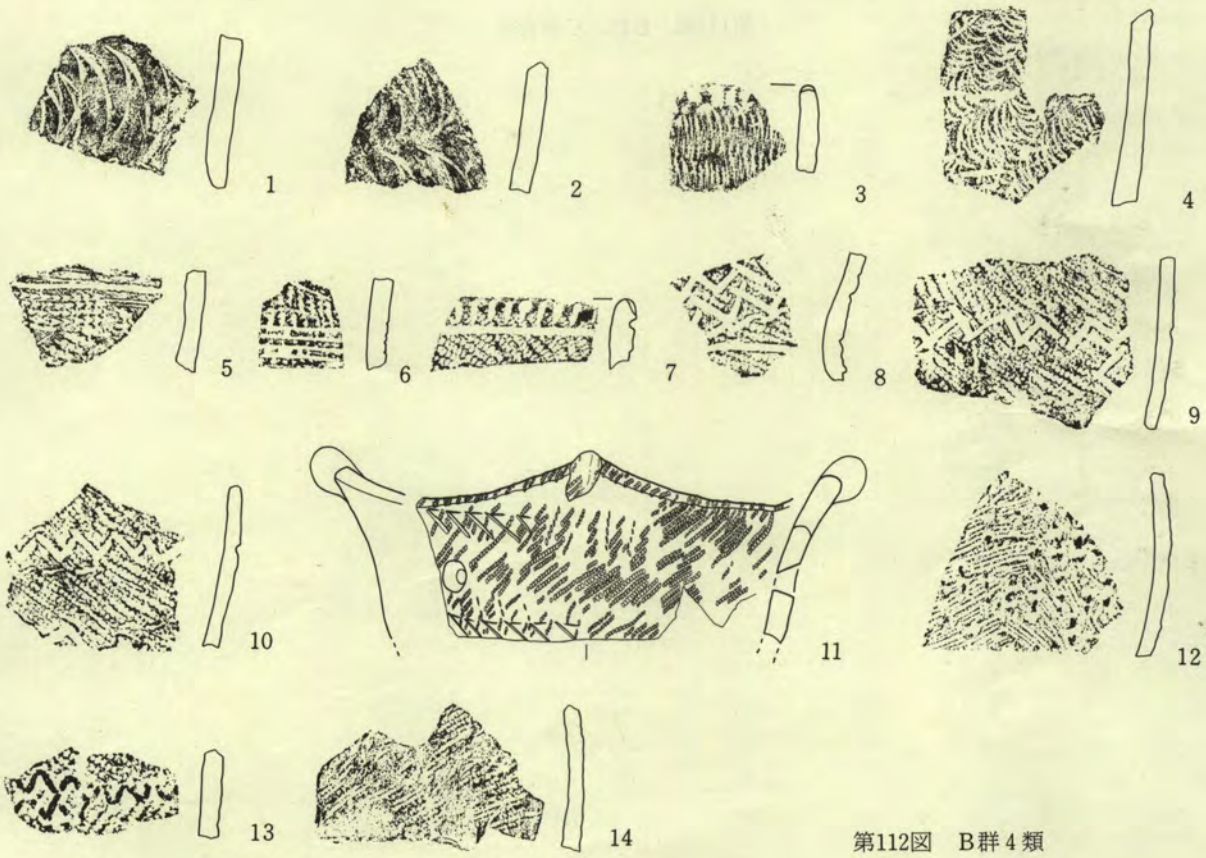
6．波状貝殻文を施した後、平行沈線文を施す胴部片で、興津II式に比定される。

7～10は同一個体の口縁部片～胴部片で、単節の RL を充塡する。外面口唇部端には縦位の刻み目を連続させ、太目の沈線文を横位に廻らし、その間に鋸歯状文を施す。大木5式に比定されよう。

11．14は同一個体の口縁部片と胴部片で、細かい単節の LR を地文とする。口縁は4単位の波状形で、波頂部外面に小突起を付す。口唇部下と胴部に斜位の刻み目を部分的に施す。大木系の所産であろう？

12．細い四条一組の櫛歯状施文具により、沈線文を集合させ、半截竹管による刺突文等を施している。

13．地文に RL と LR を羽状縄文的に施した後、波状に粘土紐を貼付する。大木5式に比定されよう。



第112図　B群4類

B群C群底部（第113図）

1～7の内、3を除いて前期諸磯式に比定されると考えられる底部片である。

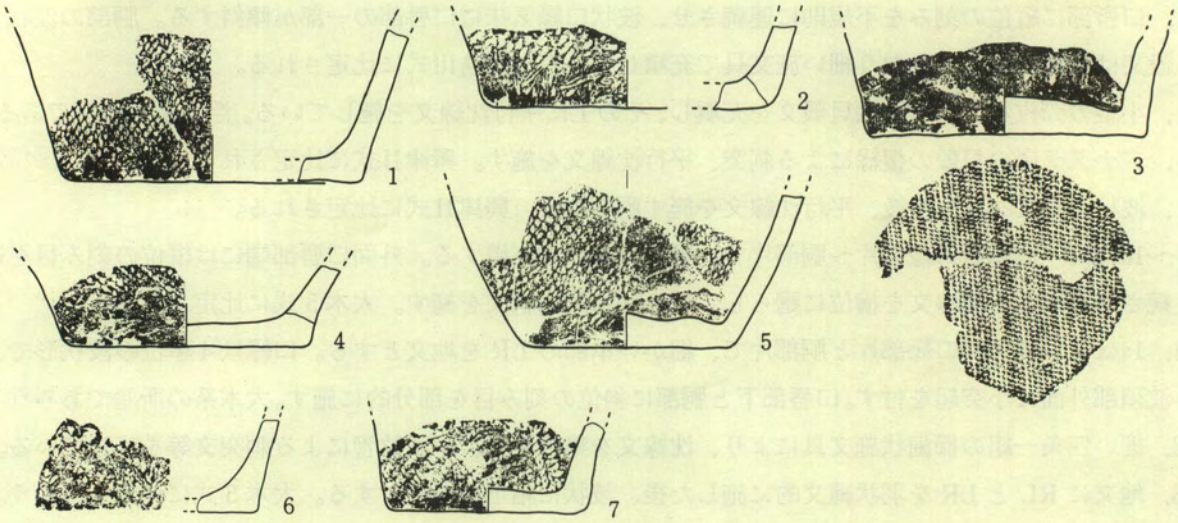
1．7は RL と LR の地文を施す。直線的に外反する胴部へ移行する。

2．底部よりやや丸味を呈して立ち上がる。

3．二本潜一本越の網代痕を呈する。後期の所産のものであろう。

4．やや開き気味に外反する。地文は RL を施し、5は内湾する胴部へ移行し、地文は LR で施す。

6．直線的に外反する胴部へ移行する。原体は不明である。



第113図　B群、C群底部